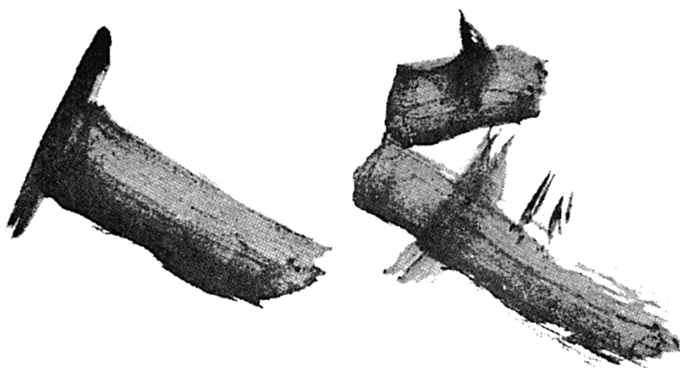




第五八号



2011

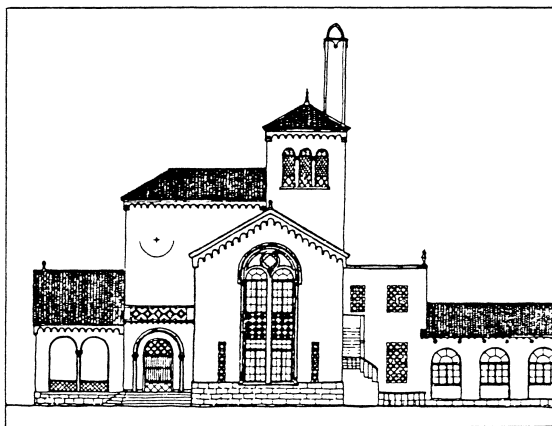
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第五八号

2010年4月—2011年3月

も く じ



随想

レンズを透してみた古都

周 東平

1

講演

夏期公開講座

6 6

自己を語る——勝小吉『夢酔独言』——（永田知之）／
最初の地球の歩き方——佐野實『南洋諸島巡行記』（磯
部甲陽堂、一九一三年二月）（籠谷直人）／我いまだ
木鶏たりえず——中島敦『名人伝』の世界——（富谷 至）

彙報

12

共同研究の話題

17

公募共同研究

ほんとうに人文情報学の基礎を築けるのか？…… 山崎 直樹
生命知創成に向けたプラットフォームの構築…… 加藤 和人
共同研究

トラウマ——出来事と言葉のはざまに……

立木 康介

人民の中へ……

永瀬 伊織

「廃都」を記念する……

黒岩 康博

古鏡研究と収蔵家たち……

岡村 秀典

所のうち・そと……

27

所の敷居にたたずんで……

金 志玖

規律と欲望のクリオン島……

日下 渉

文書の墓場と執念の行方……

石井 美保

北京滞在四ヶ月の記……

高田 時雄

書いたもの一覧……

38

レンズを通して見た古都

周 東 平

二〇一〇年一月から七月までの約半年間を京都で過ごし、人文研で研究をおこなったのも、もはや過去のこととなった。しかし過ぎ去った時と、その時々光景が折につけ脳裏に浮かび、またそれはカメラのレンズを通して永遠に記録されている。ふとした時に写真を見返すと、時間の流れを遡り、再びその場に身を置いているような気持ちになる。

いまここに『人文』への寄稿を求められたけれども、半年間の雑感はずこぶる多く、何から話せばいいのか、すぐには思いつかない。まず近頃身辺で起こったことから話し始めて、最後に本題に落ち着くこととしたい。

京都大学は古朴でありながら活気に溢れ、長い歴史を持つ大学である。十年ほど前、私は人文研の招聘外国人学者となり、京都大学の一〇〇周年記念行事を身近に体験することができた。そのとき大学内で通知されていた「京大百年」関連のニュースのうち、少なからぬものが自らへの批判と過去への反省とを含んでおり、まさに「一日三省」の精神を受け継ぐものであった。



思うに、これこそが京大の名を高からしめた、一つの精神的源流である。それに引き換え、今年の四月六日に我が母校廈門大学は創設九〇周年を迎え、また二四日には清華大学が一〇〇周年を迎えたが、その祝賀行事はうわべの盛況ぶりを取り繕い、人の手柄まで奪って並べ立てるべく、できることはなんでもやり尽くしたようなもので、反省の思いを込めた行事などはまったく見あたらず、自省批判の精神を欠いており、これを良い機会にして自らを真に向上させることは難しかった。

目下のところ、多くの中国の大学が建設現場に成り下がり、「大楼あるも大師なし」なのとは対照的に、京大の少しばかりごたごたしたキャンパスは、昔のままに質朴で飾り気がなく、周辺の喧噪もその静謐な雰囲気を侵しておらず、十数年前（あるいはそれより前）の「雲階 月地 依然として在り」というありさまは、再び故地を訪れた私にいつそう親しみを感じさせた。人文研はこの雰囲気さらに凝縮している。北白川分館の典雅で重々しいロマネスク建築は、豊富な所蔵資料と精緻な研究成果とともに、人に重厚で落ち着いた感覚を与える。毎週金曜日に、富谷至教授が主宰する「漢簡語彙」研究班のメンバーと一緒にここで議論し、収穫を分かち合ったのは、ほんとうに愉快なことだった。

変わったのは人文研の新しい本館だが、その面積は広くなり、設備も整って、古典的な分館と遙かに呼応していた。毎日、宿舍のあった岩倉から本館4階の研究室にたどり着くと、同僚た



ちが私より早くやってきて、さらに遅くなってから帰るのを目にしながら、珈琲の深い香りとお茶のすがすがしい香りのなかで、日々の研究生活を送った。

京都は悠久の歴史を持ち、大戦の被害もなく、日本文化の代表として被写体には事欠かない。私は余暇を利用して、大通りから路地裏まで歩きまわり、レンズを透して、京都を代表とする日本文化と人々の生活を観察し、記録し、体感し、私の撮影趣味を大いに満足させた。著名な古都として、京都には御所（写真1）や貴重な国宝、古寺民居（写真2）、民間工芸があり、二月初めの吉田神社節分祭から、壮観な葵祭や活気あふれる祇園祭に至るまで、多くの風俗も残っている（写真3）。山川は美しく、花が絶えず、春の山は黛を描いたよう、緑の草はしとねのよう。桂川、宇治川の素晴らしさ、法然院付近の椿、三室戸寺の蓮は言うに及ばず、毎日通りがかる鴨川のほとりにも、ツツジ、桜、アジサイが相次いで咲き誇り、「乱花 漸く人眼を迷わさんと欲す」の感があつた（写真4）。さらに幸いなことに、鴨川付近である日の夕暮れ、車中から市民に手を振られる天皇皇后両陛下にも思いがけなくお目にかかった。加えて、善良で、謙虚で、それでいてしっかりと自信を持った人たち、優美な京ことは、美しいとりどりの料理、それらは人を、いつまでもここに居たい気持ちにさせた。

いま私の手元にある、最も心に残る一枚の写真には、可愛らしい女の子が写っている。この子には二月一三日、つまり中国





1. 御所の朝



2. 知恩院山門

旧暦の「除夕」の午後に、私と家内が鞍馬寺に向かう山道の途中で、偶然出会った。お母さんによれば、ようやく一歳八ヶ月になったばかりとのこと。その純真なまなざしは、その後この写真を見た多くの友人たちを虜にした。

最後に、日本のみなさんがこのたびの東日本大震災の損害からすみやかに復興されることをお祈りします。世界がこの子の目のように純真で、平和と幸福とに満たされますように。

(翻訳 宮宅 潔)





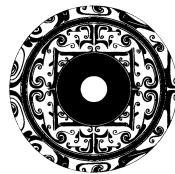
3. 北野天満宮梅花祭



4. 鴨川風景



講演



夏期公開講座

自己を語る

——勝小吉『夢酔独言』——

永田知之

四一石という微禄の幕臣勝小吉（左衛門太郎惟寅、一八〇二～一八五〇）が今日に幾許か名を伝える要因は、息子が勝海舟（一八二三～一八九九）という事実、彼自身が残した著書『夢酔独言』（以下、『独言』、この二つに尽きる。『独言』本文の冒頭にいう。「おれほどの馬鹿な者は世の中にもあんまり有るま

いとおもふ故に、孫やひこ（引用者注…曾孫）のためにはなしてきかせるが、能よく不法もの馬鹿者のいましめにするがいいぜ」。続けて、自らの半生をこの口調で語り出す。曰く、幕臣の妾腹の子だが、父の本宅で悪戯三昧に育つ。五つ（以下全て数え年）の時、近所の子供に風を壊されたので石で相手の顔を殴って血を出させたら、怒った父に下駄で頭を打たれ、大人になっても月代を剃る時、剃刀が傷跡に「ひつかかつて血が出る」、その度に喧嘩相手の事を思い出す云々。

七歳、幕臣勝家の養子（当主）に。幼少ゆえ、なお実家で暮らす。武芸に熱中。一四歳、七・八両を懐に江戸を出奔。箱根越えを助けてくれた道連れが実はごまのはえで一文無しに。人々の施しを受け、伊勢神宮に参拝。四ヶ月後、江戸へ帰着。

一六歳、役職を得るべく有力者宅へ詣でるが、記帳するにも学問嫌いで「手前の名がかけなくてこまつた」就職活動は当然失敗。二一歳、近所の親分を気取るが交際で金に困り、三年前に娶った勝家の娘を置いて、再び出奔。遠州にて剣術を指南するが、親戚の説得で江戸へ戻るや、父に座敷備え付けの檻へ放り込まれる。

「入獄中」、出奔前に妊娠していた妻が長男麟太郎義邦（海舟）を産む。やや反省したか、獄中で読書、手

習いを始める。二四歳で出獄。父に諭され就職運動を再開。

だが、翌々に父が没し、就職への意欲を失う。刀剣の鑑定やよろず人の世話で金を稼ぎ、海舟ら一男二女を養育。後に度々の不行跡で怒る実家の長兄に、また檻へ入れられかけたが「したいほどの事をして死ぬ」と思い固めて、家督を海舟に譲る。

喧嘩に悪所通い、長兄が保管する公金二百両を盗むなど、なお放蕩の例は尽きない。犬に噛まれて重傷を負った九歳の海舟を、三〇歳の小吉が水垢離して、平癒まで七〇日、独りで看病した『独言』中の逸話は、各種『海舟伝』の山場の一つだ。ただし一大事の最中、悲嘆する家人に「思ふさま小言をいつてたさちらし」た傍若無人さを取って書き記す点は見逃せまい。

隠居して夢酔と号した直後、困窮する武家の名代で三八歳の小吉は摂津へ赴く。首尾よく領民に六百両出させたが、名目は年貢金の前借り。名門旗本にしてしかり、御直参の名は、もはや彼らの立場を保障しない。祖父が幕臣の株を買った小吉の場合はなおさらだ。

人助けによる摂津行きの翌年、無断旅行の廉で公儀の謹慎処分を受けた小吉の心中や如何。腕が立ち胆力もあるが世に居場所はなく、遣り場を得ぬ情熱が、多く無頼という形を取る彼の人生に、幕府衰亡の影を見

るのも不可能ではなからう。

さて、『独言』の公刊は明治の世、一八九九年、小吉の死後約半世紀、海舟の没年から翌年までの雑誌『旧幕府』への掲載が最初だ。その目次に「勝海舟父夢酔自伝」とある。

九世紀の中国に存在したが、先発の類義語「自叙」などに比べて影の薄かった「自伝」は、autobiography（一八世紀末に登場）等の訳語として、遅くも明治十年代に採用された。ただ、本格的な普及は、福澤諭吉『福翁自伝』の登場を待つ。『旧幕府』誌が『独言』を「自伝」と称したのは、前年に現れた同書の影響と見える。

思うに、かの『フランクリン自伝』（原題は *memoirs*、思い出）以来、人間的成長の記録という側面が、同種の著作には普遍的だ（従って著者の多くは各分野の成功者）。例外とて、こういった主流からの意識的逸脱と考えれば、その影響下に在ると思しい。

『独言』に、成長の軌跡を描く意識は希薄だ。謹慎の後には町の世話役、用心棒、小金貸しとして「所の旦那のよふ」だった小吉は四〇歳の折、今度は不良幕臣として一家で他家に「押込め」られ、それを契機に來し方を書き残す気になる。

その経緯は、『独言』の序文に詳しい。例えば徳川

最初の地球の歩き方

——佐野實『南洋諸島巡行記』(磯部甲陽堂、一九三三年三月)——

籠谷直人

家と先祖の恩を思え、学問と勤めに励め、敵を怨むな、妻子に感謝せよ、などと言葉を並べ「たとえばおれを見ろよ」、そうしなかったからこの有様、という。全書の結語にもこうある。「四十二」になつて始^{はじめ}て人倫の道、かつは君父へつかへる事、諸親へむつみ、又は妻子、下人の仁愛の道を少ししつつたら、^{これまで}是迄の所行がおそろしくなつた。よくよく読^{よん}で味おふべし。子々孫々まであなかしこ」。

かかる意図も、確かにあつたろう。だが、こうは考へられまいか。即ち、子孫への戒を称すること、一応は体制内の「御簾本様」を自任する彼は「自己を語る」(そこには「自己」を騙る)気味も無くはないが)権利を得たのではないか、と。悟り顔の序文や結語があつてこそ、一向に成長せず不良に終始した、それ故に魅力的な小吉像が立ち現れた、そう思われる。

小吉の死は『独言』の脱稿から七年後、享年四九。

海舟には既に娘(小吉の孫)が二人いた。黒船が来航し彼が世に出るのはその三年後、江戸無血開城までは更に一五年を要した。

『独言』は松浦玲校訂『勝海舟全集』別巻、講談社、一九九四年に依拠し、便宜的に一部文字を改めた)

本日の講演で、私が取り上げます文献は、佐野實『南洋諸島巡行記』(以下では『巡行記』と略す)とその関係者です。佐野は、当時、農商務省実業練習生でした。彼は早稲田大学で政治経済を学び、一九〇五年に卒業します。そして練習生として、一九〇六年秋から七年間、南洋諸島を視察しました。佐野は「南洋の天地に飛躍せんと欲する者は、本書において絶好の参考資料」(「序」)になること、そして「この小著、もし急激な民族膨張の処分策に対して参考の一端」(「同」)になることを期待しています。とくに日本人が「商業移民」、つまり「行商」として南進することを勧めています。

本書の刊行が一九一三年二月ですから、帰国後にすぐに刊行されたことになるので、おそらく、この七年間で原稿を書きためていたのでしょう。当時において、本書は広く読まれました。そして、一九一四年一

一月には「増補再版」が出ます。これは一四年七月勃発の「欧州大戦の余波」〔序〕からでした。一九一四年八月に日本は第一次世界大戦に参戦し、東南アジア島嶼部のドイツ領を手中に収めます。本書は、第一次世界大戦という環境の激変のなかで、南進を志す若者の心をとらえたようです。南洋への関心の高まりは、世界大戦を契機にドイツ領の「南洋」に大きな空白ができたことが背景でした。『巡行記』は、南洋にむかう者のなかで、とくに「充分の資力を有せざる人の参考となし、且つは世人の惑ひを解かんこと」を謳っています。

本書にある「南洋」の地域概念にすこし触れましょう。いまでは「東南アジア」という世界地域が想定されますが、当時の南洋は、これとは違っていました。佐野によれば、「南洋」は「爪哇、ボルネオ、セレベス、ニューギニア、モルッカ諸島、チモール」でした。つまり、ここには今の東南アジアにふくまれる、「シンガポール、タイ、ベトナム」などの大陸部は含まれていません。「島嶼部」だけのようです。南洋のジャワは、華僑、アラビア人が「大勢力を樹立」しているのですが、佐野のなかでは、日本人が商売をするならば、ジャワをはじめとして、ボルネオ、セレベス、ニューギニア、モルッカ諸島、チモールを目標せと強調

します。実際に佐野は「七十年間に亘り、爪哇以外の諸島を巡行調査した」と記していますから、日露戦後の日本にとつての南洋は、いまの東南アジアという世界地域とはちがって、島嶼部の、限られた地域であったようです。

佐野が指摘したように、東南アジアの「大陸部」は、「南支南洋」となつて、はじめて南洋に入るわけです。これは福建や広東などの中国南部の「延長」として、東南アジアの大陸部が位置づけられていたわけです。ではこうした地域の区別はどうしてうまれたのでしょうか。徳富蘇峰が率いる民友社の『現代叢書 南洋』（吉野作造編、一九一五年一二月）が手がかりを与えてくれます。この本のなかでは、「広義の南洋」を「亜米利加に属せざる太平洋上の各島嶼、豪州、新西蘭、蘭領東印度、裏南洋諸島の総体」としています。佐野の認識と同じです。そして民友社は、「狭義の南洋」は、この「広義」の地域から「豪州、新西蘭」をのぞく地域であると定義しています（二二頁）。つまり、当時の「普通謂う所の南洋」とは、オランダ領東インド（以下、蘭印と略す）、そしてドイツ領（メラネシア・ミクロネシア・ポリネシアの諸群島）であり、イギリス領マラヤ（以下、英領マラヤと略す）を含んではいません。

そして、民友社は、こうした地域区分のなかに、東南アジアにおけるヨーロッパの植民地権力と華僑・華人の存在を強く意識していました。つまり英領マラヤでは「英国人が富裕なる支那人の参謀、又は支配人と為る」ような、権力と華僑との「協働性」をもっていたと認識していました。その他方で、蘭印では「欧州人は、如何に富有なる支那人なりと雖もその顧問と為り、又は使用人たることを喜ばず」という特徴をもっていました。オランダの植民地権力は、華僑にたいして「排他性」を示していたのです。

さらに興味を覚えるのは、イギリス領の「馬來半島の支那人は多く英語を解し得る」が、「蘭領東印度に於ける支那人は、蘭語其他の欧州語を解する者極めて少なく、土人と同様に馬來語を解するに過ぎざる」と認識していたことです。英語が「苦手」な日本人は、蘭印においてこそは、「支那人と共同提携し得る」と展望していたのです（以上、一一四―一一五頁）。「南洋」という地域は、たしかにドイツ領やオランダ領の植民地であったわけですが、マレー語と福建語を話す華僑・華人との提携が、日本の南進の好機であると考えていたようです。

我いまだ木鶏たりえず

——中島敦『名人伝』の世界——

富 谷 至

中島敦（一九〇九―一九四二）、東京四谷生まれ。父、中島田人、祖父は漢学者の中島撫山であった。いわゆる「四修」で旧制第一高等学校に入学し、東大国文学科を卒業した。経歴が物語るように並外れた秀才であったが、短いその生涯は、必ずしも恵まれてはいなかった。病身で横浜高等女子師範、パオオ南洋庁国語編修書記と職をかわり、昭和十七年に没した。享年三三歳

生前に必ずしも多くない歴史短編小説を残したが、『弟子』『李陵』『名月記』などの珠玉の名編は広く知られている。

ここでとりあげる「名人伝」は、死の直前にかかれ、雑誌『文庫』一二月（一九四二）に発表された。『名人伝』は中国古代の諸子百家列禦寇の著作とされる『列子』を題材にして構成された。中島敦は、『列子』に見える独立した射に関する記事を、紀昌の射の熟達

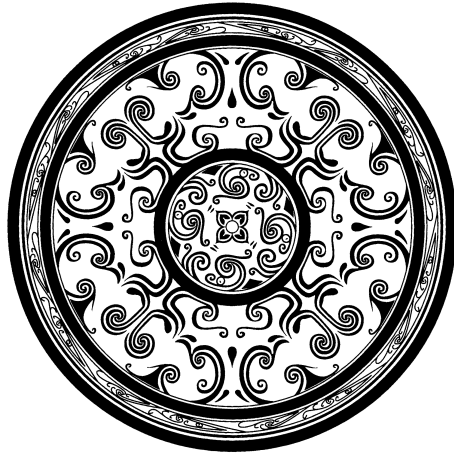
談に引用し、かつ一つのテーマに集約させたのである。

それには、難解な『列子』を正確に読み込み、その思想を正確に理解した上で自己の小説に援用する、それは並外れた漢文読解力、小説の構成力、作家としての才能をもって始めて可能である。しかも、彼の文章は、メリハリのきいた漢文調で冗長さは全くない。紀昌の上達、変化を描くに弓矢の如く鋭さをもつ。

この名作は、しかしながらそれだけではない。

意識した技巧的文章とフィクションの構成を各所にちりばめる。それは、叙述、描写の卓拔さという小説的技巧、「不射之射」めぐる小説的展開、構成の技巧である。

いったい、究極の射とは、射を超越した、「射を意識しない無意識の射」（『列子』黄帝）であるが、中島はそのことを十分にふまえつつ、「射の実際的行為をしない射」としての「不射之射」をまず小説の中で登場させ、さらにすすんで「行為者が宇宙、自然と一体化し、行為者自身、自身の意識、自我が昇華した状態」をえがく。「至爲無爲、至言去言、至射無射（至爲は爲すなく、至言は言を去り、至射は射する無し）」これが究極の道という「紀昌の到達点」「木鶏の思想」の演出に他ならない。



彙報

おくりもの

井波陵一教授は第二〇回蘆北賞を受賞
(二〇一〇年十一月十一日付)。

訃報

- 。太田武男名誉教授(九二歳)は、五月七日逝去。
- 。梅棹忠夫名誉教授(九〇歳)は、七月三日逝去。
- 。ESPOSITO, Monica 招へい外国人学者(四八歳)は、二〇一一年三月十日逝去。

人のういき

- 。船山徹准教授(東方学研究所)は当研究所(東方学研究所)教授に昇任(四月一日付)。
- 。石井美保を准教授(人文学研究所)に採用(四月一日)。
- 。金志玟を助教(東方学研究所)に採用(四月一日)。

。白井哲哉を特定研究員(科学研究)に採用(四月一日)。(継続)

。VITA, Silvio イタリア国立東方学研究所所長は、客員教授(文化研究創成研究部門、四月一日〜二〇一一年三月三十一日)。

。JACQUE, Benoit Marcel Maurice フランス国立極東学院京都支部長は、客員准教授(文化研究創成研究部門、四月一日〜二〇一一年三月三十一日)。

。袁広泉 大学共同利用機関法人人間文化研究機構地域研究推進センター研究員は、客員准教授(附属現代中国研究センター、四月一日〜二〇一一年三月三十一日)。

。古松崇志(東方学研究所)助教は、辞任の上(九月三十日付)、岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授就任。
。李昇燁(人文学研究所)助教は、辞任の上(二〇一一年三月三十一日付)、佛教大学歴史学部准教授就任。

海外での研究活動

(原則として30日未満のものとは割愛した)

。李昇燁助教(人文学研究所)は、二〇〇九年七月二八日大阪発、ハーバードイェンチェン研究所に於いて研修(訪問学者プログラム)を行い、二〇一〇年一月十九日一時帰国、二〇一〇年二月十六日再出国、ハーバードイェンチェン研究所に於いて研修(訪問学者プログラム)を行い、二〇一〇年七月十五日帰国。

。王寺賢太准教授(人文学研究所)は、一部文部科学省科学研究費補助金により二〇〇九年十月二日大阪発、パリ第一大学に於いて十八世紀フランス哲学における普遍史概念の変容の研究を行い、二〇一〇年十月一日帰国。

。船山徹教授(東方学研究所)は、九月十日大阪発、ライデン大学に於いて客員教授として授業担当ならびにインド中国仏教史の資料収集を行い、十二月十六日帰国。

。高田時雄教授(東方学研究所)は、九月十日大阪発、北京大学国際漢学家研修基地に於いて海外漢籍に関する講義

と研究を行い、十二月七日一時帰国、十二月十四日再出国、北京大学国際漢学家研修基地に於いて海外漢籍に関する講義と研究を行い、二〇一一年一月九日帰国。

。石井美保准教授（人文学研究部）は、二〇一一年一月二五日大阪発、エディンバラ大学に於いて「南インドにおける神霊祭祀と憑依儀礼に関する人類学的研究」及び「身体化された心の人類学的解明」及び「社会的なるものの再構築」に関する文献研究、論文執筆及び研究会に参加し、三月八日帰国。

外国人研究員

。METZLER, Mark テキサス大学オースティン、歴史学・アジア研究准教授
近現代日本史、グローバル・ヒストリー（ヨーロッパ、中国、合衆国）、開発政治経済学

（文化連関研究客員部門）
受入教員 籠谷教授
期間 七月二一日～
二〇一一年一月二十日

。LAVOCAT, Françoise パリ第七大
学教授
十六、十七世紀のヨーロッパ文学におけるフィクション概念の研究

（文化生成研究客員部門）
受入教員 大浦教授
期間 十月一日～十二月三一日
。PENNY, Benjamin オーストラリア
国立大学アジア太平洋カレッジ文化・
歴史・言語学部副学部長
現代中国の宗教実践

（文化生成研究客員部門）
受入教員 田中教授
期間 二〇一一年一月十四日～
三月三十日
。朱 岩石 中国社会科学院考古研究所
研究員
東アジア初期仏教寺院の研究

（文化連関研究客員部門）
受入れ教員 岡村教授
期間 二〇一一年一月二四日～
七月二三日

招聘外国人学者

。ESPOSITO, Monica

道蔵輯要の研究

受入教員 麥谷教授
期間 二〇〇六年四月一日～
二〇一一年三月十日（継続）

。SAWADA, Janine Tasca Anderson
ブラウン大学東アジア研究および宗教
研究学部教授
前近代日本の富士山信仰—宗教史および政治史的研究

受入教員 横山教授
期間 四月十四日～六月七日

。李 明輝 台湾中央研究院文哲研究所
研究員（教授）
日本における朝鮮の儒学研究

受入教員 金教授
期間 六月七日～六月三十日
。GROSS, Ariela 南カリフォルニア大
学歴史学部教授
人種表象の国際比較研究

受入教員 竹沢教授
期間 六月一日～六月十四日
。LEGITIMO, Elsa Immacolata シェ
ネーブ大学助教授
漢訳増一阿含経の研究

受入教員 船山教授

期間 六月十四日～九月九日

。鄭 鍾賢 東国大学校文科大学国語国文学科研究教授

植民地期（一九一〇～一九四五年）における日本帝国大学の朝鮮人留学生研究

受入教員 水野教授

期間 八月一日～

二〇一一年七月三十一日

。FIEVÉ, Nicolas Bernard フランス国立極東学院教授

千利休の茶室―その建築と時空間

受入教員 田中教授

期間 二〇〇九年十月一日～

二〇一〇年十二月三十一日（継続）

。張 思 南開大学歴史学院教授

二十世紀中日韓村落共同体比較

期間 十月十五日～

二〇一一年四月十四日

。范 金民 南京大学歴史学系教授

中国明清時代史および日本関係史

受入教員 岩井教授

期間 十一月十一日～十一月三十日

金 仲燮 慶尚大学社会学部教授

日本の被差別部落と韓国の白丁の比較研究

受入教員 竹沢教授

期間 二〇一一年一月六日～

二〇一二年一月四日

。STEGEWERNS, Dick オスロ大学文学部文化研究東洋言語学科准教授

戦争の再演…戦後日本戦争映画における自己と他者の表現

受入教員 水野教授

期間 二〇一一年一月十七日～

二〇一一年十二月十六日

。METZLER, Mark テキサス大学オースティン、歴史学・アジア研究准教授

十九世紀グローバルヒストリーのなかの大不況

受入教員 籠谷教授

期間 二〇一一年一月二日～

二〇一一年七月二十日

外国人共同研究者

。MARTINI, Giuliana

方学研究所研究員

イタリア国立東

Samathadeva's Abhidharmakos

opavikāt ika の英訳と比較研究

受入教員 船山教授

期間 四月二日～

二〇一一年三月二十日

。SCHERRMANN, Sylke Ulrike
青島旧蔵ドイツ語文献中の法制関係資料の調査

受入教員 岩井教授

期間 五月一日～

二〇一一年三月三十一日

。ANDREA, De Antoni カフォスカリ大学外国語学部東アジア学科非常勤講師

死の場所―現代の京都における死に関する宗教象徴と境界的な空間

受入教員 田中教授

期間 七月十六日～

二〇一二年七月十五日

。MORRIS, Yaara イタリア国立東方学研究所研究員

鎌倉時代末期～江戸時代初期にかけて天河および箕面における弁財天の信仰

受入教員 田中教授、

ヴァイータ客員教授

期間 八月十三日～十月十六日

。鄭 琮樺 韓国映像資料院韓国映画史
研究所研究員
植民地期朝鮮と日本の比較映画史的考
察

受入教員 水野教授

期間 九月一日～

。艾 菁 復旦大学外国語学院日本語・
日本文学学部専任講師
冷戦後の日本におけるナショナリズム
の研究

受入教員 山室教授

期間 九月一日～

。趙 晶 中国政法大学法学院研究員
中国古代法制史の研究

受入教員 富谷教授

期間 九月六日～

。葉 倩瑩 中山大学歴史系一貫制博士
課程
日本顧問と清末新政

受入教員 石川准教授

期間 十月一日～

二〇一一年九月三十日

。郭 永利 蘭州大学歴史文化学院副教
授
甘肅における魏晉十六国代の壁画墓

受入教員 岡村教授

期間 十月一日～

。薛 明 華東師範大学歴史系博士課程
江戸時代の日中関係史

受入教員 岩井教授

期間 十一月八日～

二〇一一年四月七日

。陳 越 浙江理工大学講師
中国人留學生の翻訳活動と日中語彙交
流史研究

受入教員 山室教授

期間 二〇一一年三月一日～

二〇一一年八月三十一日

外国人研究生

。ALPERT, Erika Renee
Language and the Marriage Market
in Kyot, Japan

受入教員 田中教授

期間 二〇〇九年四月一日～

二〇一一年三月三十一日（継続）

。何 嘉
環境の文化人類学について

受入教員 田中教授

期間 二〇〇九年十月一日～

二〇一二年三月三十一日（継続）

。金 月

帰化した在日中国人のアイデンティテ
ィの形成とあり方

受入教員 田中教授

期間 四月一日～

二〇一一年三月三十一日

。SZABÓ, Zsuzsanna
近代文学雑誌のナラトロジーの種類
変化

受入教員 大浦教授

期間 四月一日～

二〇一二年三月三十一日

。HOFNUNG, Tamar
バブル終結後の日本における、高学歴
者の就労形態の変遷と個々人の価値観
の変化

受入教員 田中教授

期間 十月一日～

二〇一二年三月三十一日

。鄭 顯璐

現代に生きる日本の伝統行事

受入教員 田中教授
期間 十月一日～
二〇一一年九月三十日

漢字情報研究センター講習会

・二〇一〇年度漢籍担当職員講習会（初級）

第一日（十月四日）

オリエンテーション 岩井 茂樹
漢籍について 井波 陵一
カードの取り方―漢籍整理の実践

高井 たかね

第二日（十月五日）

工具書について 山崎 岳
実習を始めるにあたって 梶浦 晋
漢籍目録カード作成実習

第三日（十月六日）

目録検索とデータベースの検索
安岡 孝一

漢籍データ入力実習（二）

第四日（十月七日）

和刻本について
文学研究科准教授 宇佐美 文理
漢籍データ入力実習（二）
第五日（十月八日）

朝鮮本について 矢木 毅
実習解説 永田 知之
書庫見学・情報交換 井波 陵一

・二〇一〇年度漢籍担当職員講習会（中級）

第一日（十一月八日）

オリエンテーション 岩井 茂樹
経部について
文学研究科教授 池田 秀三
叢書部について 藤井 律之
叢書と漢籍データベース 安岡 孝一

第二日（十一月九日）

史部について 宮宅 潔

漢籍データ入力実習（一）

第三日（十一月十日）

子部について 武田 時昌

漢籍データ入力実習（二）

第四日（十一月十一日）

集部について

人間・環境学研究科准教授

道坂 昭廣

漢籍データ入力実習（三）

第五日（十一月十二日）

漢籍関連サイトの利用について
附属図書館情報管理課電子情報掛

お客さま

実習解説 大西 賢人
情報交換 永田 知之
井波 陵一

九月二十七日 中共中央文献研究室日本視

察団 団長 熊 華源 他十二名

十一月一日 中共中央文献研究室 副主

任 金 冲及 他三名（森、袁、小

野寺が対応した）

十一月三十日 全北大学校人文大学史学

科 前学長・教授 河宇鳳 他二名

（水野、矢木が対応した）

十二月三日 中国地方志指導小組弁公室

訪日団 副主任 李 富強 他六名

（水野、森、石川、小野寺が対応し

た）

二〇一一年一月十八日 高麗大学校中国

学研究所、同日本研究センター 中

国学研究所所長 崔 圭鉢 他五名

（水野、金、高木が対応した）

ほんとうに人文情報学の基礎を築けるのか？

山崎 直樹

昨年度たちあがった当研究プロジェクトでは、『文字と非文字のアーカイブズ／モデルを使った文献研究』と題する公開シンポジウムを開催した（二〇一一年年二月一八日）。タイトルが「／」で仕切られているのは、このシンポジウムの前半がアーカイブズに関する報告、後半が文献研究、と大きく二つに分かれていることによる。

このタイトルを見たかたは、たいてい「いったいどんな関係があるのだろうか？」と、当研究プロジェクトの課題名をもう一度見直すことになると思われる（課題名は「情報処理技術は漢字文献からどのような情報を抽出できるか——人文情報学の基礎を築く」）。

以下で、その「関係」をかんたんに説明する。

「アーカイブズ篇」は、「文字資料アーカイブズの現在——特に検索可能性を中心に（岡本真）」と、「動画のテキスト処理（安岡孝二）」「写真の検索可能性につ

いて考える（守岡知彦）」の三つの報告からなる。オーディオドックスな文字資料を扱ったアーカイブズの問題から、文字資料ではない資料のアーカイブズの問題へと発展する流れになっている。「文字と非文字の／」と題した所以である。そして、これらの報告は一貫して「有益な検索をするためのメタ情報」という観点からの問題提起が行なわれている。

「文献研究篇」は、「ネットワーク分析からみた共観福音書間の比較研究（三宅真紀）」と「異なる文献間の数理的な比較研究をふり返る（師茂樹）」の二つの報告からなる。複数の文献間の関係を、どう数値化して表すか、は古くから存在する研究課題であるが、前者の報告は、ネットワークモデルを使ってこの課題に挑んだものである。後者の報告は、その他のさまざまな「数理モデル（例えば、ヒゲラムモデル、スプリット分解モデル、など）」を使った、「文献の特徴の数値化して示す」研究の歴史を概観したものである。

実は、当プロジェクトの課題名「情報処理技術は漢字文献からどのような情報を抽出できるか」は、単なるデータマイニングを連想させるが、それと「人文情報学の基礎を築く」という大それた副題は、釣り合っていないのではないかという批判が（内部からも）ある。また、「人文情報学」と「情報処理技術を使った

人文科学」はどうか、という問題提起もある（世間では、「人文情報学」の英訳に“Digital Humanities”を使ったりすることもあるので、よけいにややこしい）。

これらの問題提起に答えるためだけというわけでもないが、当研究プロジェクトでは、「漢字文献」に取り組む前に、「文献」とは何か、特定の目的をもった研究のためには、それをどのようにモデル化しうるのが、という問題を取りあげたいと考えた。その表現が、この公開シンポジウムである。

なお、このシンポジウムの予稿集は、当研究班のウェブサイトで見る（<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~ymznk/kanzi/>）。

生命知創成に向けたプラットフォームの構築

加藤 和人

現代の科学、特に生命現象を対象とする生命科学が社会的に大きな存在になっていることは間違いない。

しかし、このような状況が生まれたのは、二〇世紀の後半、とりわけ一九七〇年代以降のことである。それまで自然哲学的な色彩を持つ研究分野であった生物学は、医学領域のみならず日常生活における生と死の領域全般に影響をもたらす生命科学へと転換を遂げた。加えて、ヒトゲノムプロジェクトに見られるように、国境を越えた大型共同研究という新しいスタイルも生み出した。

こうした状況の中、生命科学を社会の中に改めて位置づけ、社会の視点を加味した新しい「知」として捉えなおすことが必要であるとの認識のもとで本研究会は立ち上げられた。社会的視野と見識を備えた生命科学に関する新しい捉え方を「生命知」と名付けることにし、科学者、哲学者、社会学者、人類学者、歴史学者などが共通のプラットフォームを構築することを目指している。

初期の研究会では、人文社会科学研究者と自然科学研究者との協働のあり方について検討した。生命科学が社会の中で大きな存在になったにも関わらず、その変化を社会の側から検討する作業は、とりわけ日本においては貧弱であり、活性化することに意義があると確認した。そのために、社会との関わりを意識しているが人文社会科学者との接点が少ない研究者を招くこ

とに加えて、時には、自らの定めた方向に自信を持って進んでいる研究者に対して、人文社会科学者との交流により社会的課題に対する「気付き」がもたらされるような場が設定できるとよいということも話題になった。

年度後半には、細胞の機能や構造を人工的に再現すること、生命現象の理解と新規技術の創出を目指す「合成生物学」を取り上げることにした。二〇一〇年十二月、立命館大学で、日本科学史学会・生物学分科会との共催で実施した公開シンポジウム「合成生物学・倫理・社会」では、合成生物学の気鋭の研究者である京都大学白眉プロジェクトの齊藤博英氏と、科学史家の米本昌平氏と林真理氏、そして本研究班の代表である大阪大学の小林傳司氏（科学技術社会論）などの参加を得て、合成生物学の現状と社会的課題について検討を行った。後半で実施したパネルディスカッションでは、米国を中心とする西洋社会では、「合成生物学」という新しい名称を掲げ、そこに既存の分野から研究者が集まることで目に見える新領域と研究者コミュニティができているのに対し、対応する日本の研究者は既存の領域に分散して存在していること、そのため合成生物学という明確な領域の存在が見えにくく、結果として倫理的社会的課題についても西洋のような

はつきりとした取り組みが行われていない、といった日本と西欧における研究の位置づけの違いなどが話題となった。

今後は、合成生物学を含む細胞の機能や生命システムの理解を目指す分野に加え、再生医学などの基礎研究と医療との境界領域にある分野も取り上げていく予定である。どのような「生命知」が見えてくるかは長期的課題であるが、まずはプラットフォームを構築するための一歩を踏み出したと考えている。

トラウマ——出来事と言葉のはざまに

立 木 康 介

ひとつの語の歴史には、それを取りまく言説の変動の痕跡が刻まれている。

一般に肉体的な怪我や傷、あるいは事物の損害を指していた古代ギリシア語の *ponos* が、「精神的な傷（心の傷）」をも意味するようになったのは、一九世紀末のことだ。当時のヨーロッパ社会に蔓延していたヒ

ステリーの研究に取り組んだ人々は、この疾患を「子宮の病」とみなしてきた前近代的な偏見の軛から患者を解き放つと同時に、ようやく科学的に探求されはじめたその病因論において、患者に「心の傷」をもたらした出来事とその記憶の役割を認識するようになった。

だが、「トラウマ」という語が今日かくも広く流通するようになった直接の契機は、一九八〇年、アメリカ精神医学協会の発行する診断マニュアルDSMの第三版に、「外傷後ストレス障害」(Posttraumatic Stress Disorder = PTSD)なる新たなカテゴリーが登録されたことだ。アメリカ精神医学が、一九五〇年代から六〇年代にかけてそれを支配していた精神分析と完全に訣別したことを印象づけたことでも知られるこのDSM-IIIは、クレペリン的な疾病分類学への回帰によって、精神疾患の特定と治療を効率化し、治療期間の短縮および治療費の抑制をもたすだけでなく、精神疾患にかかわる保険請求や損害賠償請求にあたって、支払額を算定するための明確な、つまり「客観的」な基準を提供する役目も期待されていた。ヴェトナム帰還兵の心理的障害についての調査と、性的暴力を受けた女性たちを支援する取り組みとが合流して実を結んだとされる新たな精神疾患単位PTSDの誕生は、こうして、心的外傷（の帰結）に代償が支払わ

れることを可能にする司法＝経済的システムの確立をももたらした。つまり、PTSDにおいて、トラウマはいわば社会的に認知されるべき経験として、いいかえれば、公然と語られることが社会的に許容もされ、それどころか要請されさえする経験として、生まれ変わったのだ。

このことが社会科学におけるトラウマへの新たな関心を喚び起こしたことは驚くにあたらない。ひとりの個人のみならず、ひとつの国民、ひとつの民族が集団的に経験した出来事を「トラウマ」の観点から見直すなら、人類学や歴史学、さらには社会学や政治学の広い範囲で「トラウマ」（を抱える人間集団の諸相）をめぐる研究や考察が次々と生み出されることを妨げるものはなにもない。かくして、一九九〇年代から二〇〇〇年代を通じ、「トラウマ」をめぐる言説の生産は社会科学領域においても世界的なブームに突入し、その勢いは新たなデイケイドを迎えても衰える気配がない。

こうした状況のなかで、本研究所において「トラウマ」をテーマとする研究班が組織されたことは時代の必然であると言ってよい。田中雅一班長のもと、二〇一〇年四月から活動を開始した研究会「トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究——物語から

モニュメントまで」は、本研究所の旧社会人類学部門の伝統を受け継ぎ、「主体化」（社会的存在としての主体の形成）の過程とその論理を捉えるという人間考察の根幹にかかわる課題を、トラウマ経験と向き合い、それを克服（しようと）する主体の営み（語り、記念し、あるいは忘却すること）から捉えることをめざしている。それぞれにフィールドをもつ人類学者が主戦力となる研究班だけに、これまでに扱われたテーマは、カンボジアのボル・ポト時代の記憶から北アイルランド紛争のライフ・ストーリーまで、アルメニア人虐殺をめぐる国際社会の沈黙から日本のハンセン病療養施設の活動の忘却まで、さらには、プリーモ・レーヴィとジョルジョ・アガンベンを介してその現代性が再認識されるようになった「収容所」経験の本来的な「証言不能性」の考察まで、と幅広い。これらの発表を聞いてみると、人類の歴史はすべてトラウマとその克服の歴史として書き換えられうるのではないか、個人や国民や民族のアイデンティティはおしなべてトラウマを起源として形成される一種の症状と解釈することができるのではないか、といった印象を強く抱かずにはいられない。

だが、一方で、個人的にときおり困難を感じる問題もある。「トラウマ」という語は、ある出来事の結果、

心に生じた傷（持続する苦しみ、解消されない悩み）を指すと同時に、形容詞として用いられる場合には、出来事そのものの、あるいはその記憶をも含意しうる（「トラウマ経験」という表現は、もちろんこの後者の場合だ）。そのため、この語をなにか自明のものとして、操作的に用いはじめると、ある事例においていったい何がつまるところ「トラウマ」であるのかが判然としなくなることがある。私が抱くのは、出来事と、それを語る、あるいは捉えようとする言語とのあいだに横たわる断絶こそが、トラウマが生まれる場所なのではないかという印象だ。それが起こる前と後ではなにかが決定的に変わってしまった、と言わざるをえないような圧倒的な出来事を前にして、それが何であるのか、どのような性質のものであるのかがいかにしても正確に捉えられないまま、その帰結だけが存続し、場合によっては発展し続ける。そこにおいて、私たちの言語はいつまでも出来事に追いつけないまま、それでもそれを追いかけずにはいられないのだ。そこにトラウマの秘密があるのだとすれば、トラウマを抱えこむことは、およそ私たち「話す存在」のすべてに課せられる宿命なのかもしれない。

人民の中へ

永瀬 伊織

折しも民国百年の今年の春節明け、台湾故宮博物院図書文献館・国家図書館で行った日本関係医学書調査は、幸運から始まった。「相互公開という形でどうでしょうか」どちらの図書館からも、思いがけない提案があった。台湾の人々が見つめているのは、京大の富士川文庫である。

故宮博物院が所蔵する観海堂旧蔵書は、明治初年に来日した楊守敬が日本で収集した大量の書籍を含むのだが、小島宝素が自身で写した抄本や書き入れのある宝素堂蔵書が多く含まれる。大正四年頃、森鷗外が『小嶋寶素』を書くとしたときには、宝素堂蔵書のほとんどはとっくの昔に中国に渡ってしまっていて、確な参考資料がなかったのである。もし、宝素堂の全貌を鷗外が知ることが出来たなら、『小嶋寶素』はおそらく史伝三部作の一画を占めていたに違いない。国家図書館（台北）には、二度の入明を果たした策彦周良の手沢本と思われる医方の集成『魁本 袖珍方大

全』がある。この三年ほど、香港・台湾・中国で明治以降に中国に流出した小島宝素旧蔵書を中心に調査してきたが、やっと少し光が見えてきた。これらの日本旧蔵書、中でも日本抄本はあまり重視されず、書架の片隅で時に蝕まれているに任せていた。それを早め電子化できないか。そんな提案をしていた。

小島宝素の旧蔵書を追いかける契機となったのが、武田時昌教授の「陰陽五行のサイエンス」共同研究班である。今年度からは「術数学―中国の科学と占術」と扱う範囲を更に広げ、班員も各方面から募っている。日本の陰陽寮の教科書だった隋・蕭吉の『五行大義』や、近年国宝に指定されるまで、幕末に江戸医学館へ短期貸し出しをされた時以外は姿を消していた半井家本で知られる丹波康頼の『医心方』など、班員が関心を寄せる書物をみなで会読し、時々には国内外からゲストを招いて発表して頂くのが、武田班のスタイルである。

ちょうど『医心方』巻四を読んでいた時だった。この巻は、今というへアケアの処方から始まる。手持ちの医学館の安政刊本のリプリントをぼんやり眺めていて、「僧深方」という処方が気に掛かってきた。三日がかりで、全三十巻の中で『僧深方』や『葛氏方』など気になる引用箇所を傍線を引き、ポストイットで色

分けして分類し、巨大な表を作成した。その後、医学史関係の知人何人かに僧深なる人物とその処方について尋ねたが、よく分かっているという。ならば自分でやろう。そうして今日までに、『僧深方』に始まる六朝期の古医書輯佚を重ねてきた。古医書輯佚には『三国阿晋南北朝医学総集』（人民衛生出版社 二〇〇九）のような試みもあるが、底本等の情報がなく、機械的な輯佚という印象を拭えない。

輯佚から見えてきたのは、医学知識の伝承の層次である。知識が伝えられていくとき、その時々で要求で削られたり、増広されたり、改変されたりする。それが文献学的に跡づけられるのである。同じことは、『五行大義』所引の佚書からも窺えるのである。医学書や占書といった実用書では、取捨選択が大規模に行われる。書物は生きている。人々が生きるための知恵が、古典の名を冠した実用書には詰まっているのだ。そうした声に耳を傾ける試みが、武田班ではいつも行われている。

「廃都」を記念する

黒 岩 康 博

結局平城遷都一三〇〇年祭には行かなかった。

一年間ずっと何だかんだとイベントが催されているはずだからそのどれかに行けばいいや、と呑気に考えていたのだが、大抵のものは一〇月いっぱい終わっていたのである。その埋め合わせという訳ではないが、三月の共同研究班「近代古都研究」では、明治期の平城宮址保存運動に焦点を当てた報告を行った。奈良が近代以前から持つ「南都」的要素（観光対象となる神社）と「古京」的要素（金石文考証で注目された史蹟）が宮址保存運動を経て一つとなり、「平城京」へと昇華する、という見通しを述べたが、論に雑なところも多く、大方の賛同は得られなかったように思う。

その報告の準備段階で、「廃都千二百年記念」なる特集が組まれている、一九八四年六月の『芸術新潮』を手取る機会があった。同誌に平城「廃都」を取り上げた特集があることは、以前研究班員の原田敬一師から伺ってはいたが、まさかこんなに大々的なものと

は思わなかった。その頁数は実に八五。「廃都」と聞いて、私は最初ギボン『ローマ帝国衰亡史』を思い浮かべたが、實際中を開けてみると、「第一部 平城京ができるまで」から「第五部 天平びとの信仰・大仏開眼」まで、徹頭徹尾「咲く花のにはふがごとく今盛り」な奈良時代のはなしで、遷都後の衰退する奈良の姿は微塵も窺えなかった。全くの拍子抜けである。

明治一四年一月に赴任した第三代京都府知事北垣国道が、伊藤博文・松方正義から「千年ノ旧都、奈良ノ衰廢ニ陥ラサル様、考案ヲ起ス可シ」(「塵海」明治二一年七月二〇条)と命じられて入洛した、というエピソードは非常に有名だが、そのほぼ一〇〇年後、地元の奈良文化財研究所所長坪井清足が監修した一般雑誌の特集タイトルにおいても、奈良と「廃都」という言葉はいまだ密接な関係にあった。試しに学術論文データベースで検索してみると、国内の「廃都」でヒットするのは、平城京と長岡京からの遷都を指すものが殆どである。

天皇が「ちよつと東京に遊びに行つてはるだけ」という冗談(一部は本気)はさて置き、京都について「廃都」という語を用いたということを私は寡聞にして知らないし、曾て難波宮があり、最近では「大阪都」(しかしこのネーミングセンスはどうにかならないの

だろうか)構想が喧しい大阪も、「廃都」の憂き目を見たという表現で語られたことは、あまりなさそうである。最近では「武家の都」鎌倉については、サブタイトルに「死都から古都に」とある書まで刊行されているようであるが、奈良の近代を考える上でも、「廃都」(とそこからの再起)という要素は、非常に重要であろう。いつだったか、研究会後の飲み会においても、「廃都」論の必要性が声高に唱えられたこともあったように思う。

七三年後には平城廃都一三〇〇年がやってくる。その頃はまだ奈良を語る際に、「廃都」という言葉が持ち出されるのであろうか。その答は、娘か孫に墓前で報告してもらうとしよう。

古鏡研究と収蔵家たち

岡村 秀典

六年間にわたって毎週つづけてきた「中国古鏡の研究」班は、この三月をもって終了した。研究会ではお

もに古代の銅鏡に鑄出された銘文を会読してきた。

鏡銘の体系的な研究は、一九二九年の羅振玉の集成にはじまり、一九三四年にスウェーデンの言語学者カールグレンが鏡銘の詳細な訳注を作成したことによって大きく進歩した。しかし、その後の七〇年あまり、かれらの研究はほとんど顧みられることがなかった。

まもなく勃発した日中戦争をへて新中国が誕生すると、新しい国土建設にともなう遺跡の発掘が中国各地で逼迫し、考古学者は陸続と出土する新しい資料の整理と報告に追われつづけているからである。また、日本はもとより中国でも考古学者の「漢字離れ」が進み、図像紋様のほうに研究の焦点が移っていったことも一因として考えられる。紋様による鏡の編年は進んだものの、銘文をきちんと読んで報告することが、ずいぶんなおざりになっているのが現状である。そこで、わたしたちの共同研究では、まずカールグレンの論文にたちかえり、それを会読することからはじめた。音韻論にかんする知識が乏しいこともあつて、それを読み終えるのに三年を費やしてしまったが、韻文の一種である鏡の銘文を精確に読むためには、なじみのある考古学や歴史学の方法だけでなく、言語学や文学の手法を採りいれる必要のあることに気づいたのは、大きな収穫であつた。そうした予備学習をふまえ、いまだおほ

つかない足どりながら、いよいよ漢・三国・西晋代の鏡銘を時代順に集成し、ひとつひとつの銘文を解読しながらカールグレン論文にならった訳注を作成することに着手した。新しい試みとしては、三角縁神獣鏡などの日本出土鏡をふくめ、新たに出土した鏡の銘文を多数加えたことのほか、考古学の編年をふまえて前漢から西晋にいたる五〇〇年間の鏡銘の変化が理解できるように配列したことがあげられる。その成果はすでに「前漢鏡銘集釈」および「前漢鏡銘の研究」として『東方学報』第八四冊（二〇〇九年）に報告し、つづく「後漢鏡銘集釈」・「三国西晋鏡銘集釈」およびその関連論文は『東方学報』第八六冊（二〇一一年）に報告する予定である。

中国の古鏡研究の第一人者である中国国家博物館の孔祥星先生に「前漢鏡銘集釈」と関連論文の抜刷をさしあげたところ、孔先生はさっそくその抄訳をつくって中国の関係者たちに配ってくださった。それを読んだ上海の王綱懷さんは、昨年七月、所用で来日された折に当研究会にも出席され、古鏡をめぐる班員とさまざまな意見交換をおこなった。王さんは上海市の環境部局に勤務するかたわら、趣味で古鏡の収集と研究をはじめ、退職後の二〇〇四年にはコレクションの精華を集めた図録『三槐堂藏鏡』を、二〇一〇年には論

文集の『止水集』を上梓している。以前なら盗掘や偶然に発見された文物はほとんどが海外に流出していたが、最近ではむしろ中国の国内市場に多く出回るようになり、王さんのような民間の収蔵家が急激に増えている。アート紙カラー刷の『収蔵家』という隔月刊の専門誌も、一九九三年の刊行以来、号を重ねている（当研究所も創刊号より定期購入している）。とくに古鏡は出土数が多く、骨董品のなかでは割と手ごろな価格であることから、杭州のある収蔵家のばあいは、すでに一〇〇〇面をこえる個人コレクションがあるらしい。そして、王さんのように古鏡に坎する学術論文を発表する民間の収蔵家があらわれ、最近では孔祥星先生らを顧問としてむかえて骨董商と収蔵家たちのネットワークが生まれて、定期的に研究会を開いているという。台湾の研究者や収蔵家との交流がはじまり、「前漢鏡銘集釈」の抄訳が中国に出回ったのも、このネットワークを通じてであった。

王綱懷さんは北京の名門・清華大学の卒業生である。今年四月に清華大学が百周年をむかえるのにあわせ、王さんは母校にコレクションの精華一〇〇面を寄贈し、その記念事業として清華大学国際漢学研究所の李学勤所長のコーディネートにより前漢鏡銘をめぐる国際ワークショップが開かれた。孔祥星先生をはじめ、北京

大学、上海博物館、台湾の中央研究院歴史語言研究所の研究者が集い、わたしも招かれて「西漢¹妻贈夫²鏡銘研究」と題する講演をおこなった。前漢鏡銘という、いささか偏った会議のテーマになったのは、王さんの寄贈鏡に前漢代のめずらしい銘文が多いからであるが、手前味噌ながら、わたしたちの「前漢鏡銘集釈」が王さんらの注目するところとなり、テーマ設定のきっかけになったとも仄聞している。驚いたのは、この会議に北京や上海の骨董商や収蔵家たちが大勢集結していたことである。かれらはたんに美術品として鑑賞するために古鏡を蒐集しているのではなく、銘文を読み、それを研究することにも大きな関心を示していたのである。

考えてみれば、羅振玉らが活躍していたころ、収蔵家の多くは優れたデスクワークの研究者でもあった。中国のGDPが日本を抜いて世界第二位となったことにち、中国における古鏡研究はふたたび収蔵家たちがリードしていくのかもしれない。

所の敷居にたたずんで

金 志 玪

「五里霧中」。日本に留学にきた当初、私は先生から「五里霧中」と言われた。その通りであった。前も後ろも、左右も見分けられない中国学という厚い霧の中。いつになったらその霧が晴れるだろう。あるいは、中国学はそのような霧に包まれているものであって、ところどころ霧の薄くなるところがあるだけかもしれないと思ってしまう。その「五里霧」が後漢時代の隠逸した学者、張楷に由来するということを知ったのも、それから何年も経ってからであった。

さて、「所のうち・そと」。この題目を見て、私は何を書けばよいだろう、と相当悩んでしまった。「ところ」の内と外と読んで、道教瞑想の問題にオーバーストップさせてしまった。しかしそれについて述べるのはやめた。それより、研究所について何を知っているのだろうか、と重い圧迫感に迫られたからである。

研究所、居場所、私のいる所。私はその内側にいるのだろうか？ 実をいうと私は内でも外でもない、敷居

のあたりをうろついている感じがする。まだ私はこの居場所の歴史も熟知していないし、漢籍の山の中にも入り込んでいない。それでも私の書くべきものは、おそらく所に入ったばかりの人の、所内での活動についてかもしれない。内のことを知り尽くしている人は外の広がりやを述べ、外から入ったばかりのものは内の様子を、おそろおそろ述べる。おそらくそれこそが「所」の全貌を素描する作業の一つなのだろう。この「所」にはこんなことをやっている人々がいる、と分かるように。それでは、私は所との関わりで持った印象を少し述べてみようかと思う。

人文研は職場となる以前から私にとって「研究班」の場所であった。三時間休みなく、ずっと漢文を読み、翻訳と注釈を検討するところ。論述されたものの論理的な矛盾を見破ったり、反論を交わす討論会ではない。根拠をもってテキストの描き出している絵の色調や精度を微調整していく。それが私にとっての人文研の第一印象であり、今になっても私に刻印された、もっとも鮮烈な人文研像である。

麥谷先生の研究班には長年参席させて頂いている。現在は隋唐時代の仏教教学を受容・変容させた「道」に関する論を展開している道教文献を読んでいる。唐代道教の重厚さが看取できる。そこで見られる宗教思

想の展開を目にする度に、また難解な文章の訳が整然と決まり、思いもよらなかった先生方の深い読みを見る度に、研究の視野を広げかつ深めようと、心を改める。

船山先生の研究班では仏教文献の扱い方をならう機会が得られ、さらに仏教学界の研究者たちと交流できて嬉しい。そもそも宗教に興味を抱いた契機となったのは、高校時代に読んでいた印度宗教関係の書物であった。中国仏教に少し触れただけで、私の持っていたちっぽけな仏教像は激変したが、それでもなお仏教については、その言葉を操れないながらも母国のような懐かしさを感じる。

井波先生の漢籍を見る会では、分館の美しい図書室の真ん中で漢籍を見ていく作業に参加させて頂いている。身に余る贅沢な作業である。二時間、立ったまま、漢籍の刊行者や刊行年など基本書誌事項の確認から、形、紙質、所蔵者の残した痕跡をもつぶさに拾っていく。追いつけないことも多々あるが、そこにいるだけで学ぶことが多く、苦しいながらも幸せである。

博士課程の時から参席させて頂いている武田先生の科学史研究班では、いつも目から鱗が落ちるような別世界が広がって楽しい。そこでは、近代の学問の区切りは取り消され、中国人がその中で生きていた基本的

な考え方の範疇、觀念の天蓋とでもいえるものが再構成され、それを存分に見渡すことができる。音楽、色の感覚から数に関する独特な觀念・空間と時間・天文と地理の見方にいたるまで、五色彩る世界が織り上げられて、興味津々である。

退任された曾布川先生のもとに集まって発表を行う中国美術研究会では、世話役を任されている。緻密かつ丁寧な画幅の隅々の要素を追っていく発表を聞いてみると、美術研究とは様式やパターンの出典調べだ、と驚きながら、文献学と何らかの共通性を感じて面白い。もうすぐ担当が回ってくる。青緑山水の主要顔料であった空青についての、道教と本草絡みの話をしてみようと思っている。

入って一年。まだまだ不慣れなところが多いが、力づけてくれる諺がある。「塾の大三年あれば詩を吟ずる」という韓国の諺である。どんな環境におかれても、三年くらい経つと、誰しもそこで行われているものになれて「まね」をするようになる、という意味である。ややニュアンスは違うだろうが、日本語で言えば、「門前の小僧習わぬ経を読む」か。

尊敬する先輩であり先生でもある方に尋ねたことがある。どうやってそのように勉強を続けることができるのですか、と。先生は答えた。ぼんやりとした、霧

に囲まれている感じ、何も分かっていないという、無知の自覚が自分の背中を押しつづけた、と。それを聞いてとても驚いたが、その一方でとても慰められた。そう、私には研究の原動力となる「五里霧」の上に、「無知」がいつばいだ。それでもつて思い切り中国学という山の中を彷徨うことができる。これからもその辺をうろついていると思いますが、どうぞ宜しく。

規律と欲望のクリオン島

日 下 渉

今年三月、世界最大のハンセン病隔離施設があったことで知られるフィリピンの離島クリオンを訪れる機会を得た。米比関係史をひもとくと、クリオン島とハンセン病は、実は植民地主義と新興国家の独立をめぐる中心的な争点であったことが分かる。

一八九八年にフィリピンを武力で占領したアメリカは、フィリピン人を教育によって「市民」にし、民主

主義を教え込む「友愛的同化」の事業を開始する。植民地政府は全国的な教育制度を整える一方で、不衛生なフィリピン人を「浄化」しようとした。なかでも公衆衛生の最重要課題にあげられたのは、ハンセン病の管理であった。アメリカ人の軍人と教師がハンセン病を恐れたままでは、引き続き抵抗するゲリラを討伐し、英語教育を全国で確立することも困難だと考えられたからである。

一九〇五年、植民地政府は、クリオン島にハンセン病隔離施設を建設する法を制定する。病院、道路、劇場、上下水道、学校、郵便局など、当時のフィリピンの水準からすれば非常に質の高いインフラが整えられた。翌年、ヘイザー保健長官は、国中の患者をクリオンに隔離する命令を下す。強制連行は患者と家族の抵抗に遭い、しばしば双方に死傷者を出しながら続けられ、一九二〇年代には、クリオンは五千人ほどの患者が暮らす世界最大のハンセン病隔離場になった。

一九二一年、ハーディング米大統領は、ウッド植民地総督にフィリピン独立の準備が十分に整っているかを調査するように命じる。視察の結果、ウッドはフィリピンの劣悪な公衆衛生を指摘して、独立の付与は時期尚早だと主張した。同時に、ハンセン病の治療法を見つけることは「自由と民主主義の唱道者として他国

民に範を示すというアメリカのミッシヨン」に合致すると考え、公衆衛生予算の三分の一をクリオンに注いだ。これに対して、独立を求めたフィリピン政治家は、ウッドのクリオン偏重を予算の浪費だと激しく批判した。しかし、彼らはウッド退任後も、多額の予算をクリオンに用いた。クリオンを公衆衛生の成功例とすることは、彼らの統治能力をアメリカに示す絶好の機会になると考えたのである。

クリオンでは多くの食糧が無料で配給されるなど、豊かな生活が保障された。他方で、クリオンの生活は、アメリカ植民地統治のモデル・ケースとして厳しく規律化された。当局はとりわけ子供が生まれないようにと、患者の結婚を禁止し、男女の密会も防ごうと腐心した。患者の面倒をみるだけでも大変なのに、手のかかる子供まで増やしてどうするのだ、というのである。断種は教会によって否定された。かわりに、修道女たちは女性寮に鍵をかけて鷹の目で見張り、女性たちの貞操を厳しく監視した。保健長官自らが女性を囲い込む鉄条網を設置させた。

これに対して、一九三二年三月二五日、聖金曜日の深夜、教会が悔恨と自制を説くなかで、三百人の男たちが血の盟約を結び、女性寮に押し入り恋人を連れて逃亡する事件が起きる。この襲撃は、日本軍の満州に

おける略奪にちなんで「マンチュリア」と呼ばれた。クリオンは無政府状態に陥り、二日間で六百人の女性が見殺しにされた。修道女は「クリオンがソドムになった」と日記で嘆いた。託児所には、病気の感染を防ぐためとして取り上げられた子供を連れ戻そうと親たちが押しかけた。反乱者は赤旗を掲げたので「赤軍」と呼ばれた。この無政府状態は三週間後に、パラワンから到着した軍隊が首謀者を逮捕することで終息する。しかし、当局はもはや住民の要望を抑えることはできず、翌年には結婚を認め六七組が教会で挙式した。それからクリオンでは、毎年百人以上の子供が生まれるようになった。

クリオンは、いわば植民地統治のパノプティコンと、病者の欲望が生み出すアジールの間を、緊張を孕みながら揺れ動いた。クリオンにおける規律と欲望の同居は、私が今回の訪問で出会った二人の対称的な人間からも窺い知れた。一人はクナナン医師である。彼自身も快復者の息子で、奨学金を得てマニラで学位をとった。彼は強い上昇志向と島民に奉仕する情熱を語る一方で、自尊心の強さを感じさせた。私がタガログ語で話しても彼は英語しか用いない。自分がいかに自らを規律化し、幼い頃から勉学に励み、医者として島民に貢献してきたのかを延々と語った。その一方で、島

民の賭博や飲酒、怠惰といった道德的退廃を嘆いた。

もう一人は、サリというセブ島出身の五〇代の男である。彼は覚醒剤の密売を生業としていたため、四年間刑務所に入れられたこともある。覚醒剤を毎晩のようになきめて徹夜で賭博をしていたところ、ハンセン病を発症しクリオンに流れ着いた。セブに妻と子供がいるが、治療後も戻る気はなく、クリオンで一生を過ごすつもりだという。背中には大きな鷹の刺青があるが、彼の顔つきと言動には茶目っ気がある。わずかばかりの給付金を受けて、闘鶏などの賭博と友人との宴会を娯楽に暮らしている。

サリの友人たちは「こいつの指がないのはヤクザと一緒だ。失敗ばかりしているから足の指までなくなっちゃったのさ」などと彼をからかって、皆で笑いながら酒を呑む。ほとんどの者が家族にハンセン病者を持つからだろうか、クリオンの人びとは外から来た無法者にも優しい。身体の変形も笑いのネタにしながら、仲間として受け入れる奇妙な包容力だ。彼らと一つのグラスでラム酒を回し呑みしながら、マンチュリアの記憶について尋ねてみた。すると、男も女も「そりゃあ恋人と一緒になれて嬉しかったに違いないだろう」と口々に答えた。

文書の墓場と執念の行方

石井 美保

「喉から手が出るほど」という表現が、この上なく生々しくリアルな経験として感じられたことが、これまでに数度ある。いずれのときも、思い出せるかぎりでは、私はインドにいて、現地調査の最中だった。

二〇一〇年の冬、アラビア海に面した南インドの町、マンガロール。植民地時代に建てられたという参事官局の、朱色の外壁はところどころひび割れて剥がれ、黒い屋根は毎年の豪雨に晒されて傾いている。ぎしぎしときしむ木の階段を昇り、陳情を抱えた人々や役人たちが混み合う幾つものオフィスを通り抜ける。案内された部屋は広く、しんとしている。ほの暗い室内には天井まで届く巨大な書架が林立し、そのすべての棚に、茶色に変色した書類の束らしきものが、一部はむきだしのまま、一部は布袋に入れられて、鎮座している。いったい何年もの間、こうして埃をかぶってきたのだろうか。資料室。公文書の保管所。正式な名称があるのだろうか、見たところは古びた膨大な紙の束の、

墓場のようだ。

私をここに連れてきてくれた友人の弁護士が、この部屋の番人らしき中年の男性に、私に代わって用向きを告げてくれる。マンガロール近郊のペラールという村の、植民地期の、地税に関する記録はないですか？番人は、陰気な顔をして、重々しく首を振る。

——わからない。

それでも一応、彼はいくつかの棚の上から褐色の書類の束を取り出して、ページを繰ってみってくれる。

——ペラール……ここにはないようだ。

がっかりするまいと努めながら、薄暗い部屋に積み上げられた膨大な文書の山をぼんやりと見上げる。どのような体系で収蔵されているのだろうか。そもそも体系はあるのか。確かに、これほど多くの紙束の中から、ある農村に関する今から百年ほど前の資料を探し出すのは、不可能かもしれない。

ふと、番人が彼の真後ろにあるスチール製のロッカーの扉を開けて、中から数冊の冊子を取り出す。その一冊の表紙に、目が釘付けになる。「ペラール村における測量とセツルメントの登記簿」。出版されたのは一九〇四年、作成者は植民地行政官 A. E. コーチマン。ページを繰ると、当時のペラールにおける地券所有者の名前、彼らがもっていた地所の面積、払ってい

た地税の額、等々の情報が八〇頁あまりにわたって、英語とカンナダ語の両方で整然と記載されている。

これ、これ、これですよ、探していたのは！

と叫んで、書類をつかんで駆け出したい衝動をこらえ、祈る思いで番人と友人を交互に見つめる。ここからが肝心だ。いま、重い扉がわずかに開いて、向こうから希望の光が漏れ出ているが、ここで失敗すればすべてが水の泡、と経験が教えている。どのような手順をふめば、この文書を閲覧することが、あわよくば複写することが許されるのか。どのような態度で、誰に依頼すれば？ どの程度の「手数料」を払えば？

関門はいくつもある。番人の人柄や権限、厳しい上官の有無、私を信用してくれるか……。求める文書が「発見」して、それを最終的に「手に入れる」ことができるかどうか。すべては運と偶然にゆだねられているかのうにみえる。

いま、私の手元には、くだんの文書の不完全な複写版がある。「不完全な」というのは、自分自身で複写をとることができなかったために、細かな数字が読み取れないページが何枚かあるためだ。それでも——まったく手に入らないという可能性もあったのだから——私は今回、幸運だったといえる。

この文書は、二十世紀初頭の南インド農村における

測量記録であり徴税簿であるが、その内容をみると、当時の行政官が非常に細やかに村の地理や土地利用を把握していたことがわかる。村のすべての地片が地味によって数種類に分類され、荒蕪地など一部の土地を除くすべての地片について、課税額と面積、納税義務をもつ地券所有者が明記されている。この村の総面積が二千エーカーを超えることを考えると、これは膨大な労力を必要とする作業だったことは想像に難くない。しかも、行政官たちはこの作業を、（もちろん多くの人手を使いながらではあるが）自分の管轄する複数の村落で行ったに違いないのである。

この文書のように、十九世紀末頃から二十世紀初頭にかけての、植民地行政官の手になる報告書やマニュアルの類には、どれも共通して、膨大な情報が細かな字でびっしりと書き込まれている。地域の地理、歴史、人口、言語、宗教、政治組織、土地利用、財政、衛生、教育、慣習、犯罪、等々に関する長大な記述と注釈、それに数値の羅列。じつと見ていると、そのあまりの情報量と詳細さに、軽いめまいを覚えるほどだ。そして、次のような素朴な疑問をつぶやかずにはおれない。何のためにここまで？

自分の管轄する地域について、徴税に関する事柄はいうに及ばず、そのおよそあらゆる社会事象を把握し、

記述し、報告することは当時の行政官に課せられた義務であつたには違いない。だが、それだけだろうか。その多くは淡々とした「事実」の記述や、数字の膨大な羅列から、行政官個人を駆り立てていた、すみずみまで調べ尽くし記載することへの執念、もしかすると欲望のようなもののさえ、感じとられるように思われるのである。

南インドでの調査から戻ってほどなく、今度は英国にしばらく滞在することになった。いうまでもなく英国はインドの旧宗主国であり、植民地期の英領インドに関する資料が、ブリティッシュ・ライブラリをはじめとする図書館に多く収蔵されている。マンガロールの膨大な蓄積ではあるに違いないが、こちらは文書の「墓場」ではなく、むしろ生き続けている過去の、あるいは占有された知の収蔵庫という印象を受けるのはなぜだろう。

文書の探索や入手の可能性が、そのときどきの偶然に左右されるマンガロールの場合とは異なり、ここでは正しい手続きをふめば、求める資料を的確に探し出し、閲覧することができる。ただし、その資料自体が英国という地理的空間にあるということ、そして「正しい」とされる手続き、そのシステムそのものが、当

たり前だが英国の機構によって決められていること、こうしたことが、英国（図書館）による知の占有という印象を醸し出しているのかもしれない。そしてまた、英領インドの資料に限っていえば、そうした知の占有を可能としたものはおそらく、コーチマン氏のような過去の行政官一人ひとりの努力と執念の蓄積であったはずである。

とはいえ、従来型の図書館にみられるような知の集積や提供のあり方は、近年大きく変わりつつある。本誌五七号の「所のうち・そと」欄で王寺賢太さんが書かれているように、グーグル・ブックスや、その他の電子図書館の登場によって、著作権の消滅した多くの貴重な書籍がインターネット上で公開されるようになった。私たちは、文書のオリジナルを所蔵している図書館に赴かずとも、求める文書を検索し、場合によっては全文をダウンロードすることも可能になった。

こうした新たな文書の流通のあり方は、上述したような特定の地理的空間における知の占有ともみえる状況を、部分的にせよ揺るがせていくことだろう。インターネット上で公開する価値ありと判断された文書は、電子化され、無料でアクセス可能な「公共財」となっていくだろう。ただ、そのとき——マンガロールの薄暗い資料室に山積みになっていた紙の束が目に見え

——公共財として選ばれることなく、堆積したまま「発掘」されなかった文書たちは、いったいどうなるのだろうか。そうした幾多の文書は、それを作成した人々の執念や欲望とともに、朽ち果てていくほかないのだろうか。

ひるがえって、おそらく今後も決してインターネット上には現れないだろう、そうした「超・マイナー」な資料を、喉から手が出るほどに探し求める私自身の欲望や執念といったものは、いったい何に由来しているのだろうか。そして、そうした資料の一部をもとに書かれた私の「人類学的」文章などは、はたしてどのような空間を流通し、あるいは、ほどなく日の目を見ない埋葬物の一部となっていくのだろうか。

すべては結局のところ、ある程度システム化された、そのときどきの偶然にかかっているのかもしれない。

北京滞在四ヶ月の記

高田時雄

昨年の秋から正月明けまで、北京に四ヶ月滞在した。

北京大学に新設された国際漢学家研修基地 (International Academy of China Studies) の招聘で、大学院生向けの講義を担当するのが仕事である。現代中国で用いられる「基地」ということは日本でいえば大体 COE プロジェクトなどで用いられる拠点ということばに相当するので、プロジェクト期間のみの仮の施設のような印象をうけるが、北京大学のこの基地はかなり長期的なビジョンをもつて設置されたようで、キャンパス内に新たな建物の配分も受け、漢学図書館の建設が予定されている。主任は中文系の袁行霈教授で、歴史系の榮新江教授、中文系の傅剛教授が主任助理を担当している。この基地は、世界中に孔子学院を展開している国家漢語国際推広領導小組弁公室という長つたらしい名前の組織（したがって一般には国家漢弁あるいは漢弁と略して呼ばれる）が北京大学と共同して設置したもので、資金はたいへん潤沢だと聞いた。し

かしまだ建物の準備が整わないので、御存知の勾園五号楼に部屋を幾つか借りて事務室にしている。近い将来の図書館開設に向けて買い溜めしている本も、今のところその部屋に放り込んであった。購入分以外にも寄贈も増えているらしく、筆者の滞在中にも著名な清史研究家の孟森氏の遺著稿本と旧蔵書が寄贈されたばかりであった。図書館は全面的に公開して世界の研究者の利用に供したいということで、今後の発展が大いに楽しみである。またすでに若い世代を中心とした外国の「漢学」研究者が招聘されて研究に従事しており、その研究成果はサロンと称する講演会で発表されるほか、基地主催の国際シンポジウムも定期的に開催されるようである。機関誌の『国際漢学研究通訊』もすでに三冊刊行されているが、各号三、四〇〇頁もあり、通訊（ニューズレター）という名称から我々が想像するものをはるかに凌駕する豊富な内容である。

もちろん北京には何度も来たことがあるが、やや長期の滞在となると今回がはじめてであった。そんなわけで彼処にも行きたい、あれも見ておきたいと思うものがあって、実はかなり楽しみにしていた。しかし実際には四ヶ月の光陰は一瞬にして過ぎ去り、結局ほとんどが実現できずに終わったのは心残りといえれば心残りである。では一体何をしていたのかというと、まず

第一は冒頭に触れた講義である。北京だけでなく中国各地で頻繁に催されるシンポジウムにも、招待されれば行かねばならず、講演を頼まれれば、折角の好意を無下に断ることはできかねる。

講義の題目は先方の要請で「海外漢籍調査与研究」となっている。聴講の学生は歴史系と中文系の研究生で、それ以外に北京外国語大学や首都師範大学など他大学の学生もいれば、国家図書館や社会科学学院の歴史研究所に所属する若い研究者の姿も見られた。いわばモグリ聴講ということになるが、外部からの聴講は北京大学の伝統だそうで、誰に聞いてもまったく意に介していないようであった。九月に講義を始めた頃は、夏休みで大陸に旅行に来た台湾の学生も見学がてら出席していたらしく、筆者の授業風景がすぐさまブログに写真入りで紹介されたのは、正直いささか驚いた。開講の手続きが遅れたために、好い時間帯の教室はすでに塞がっていて、毎週木曜日の一、二時間目が割り当てられていた。中国の学校は朝が早く、一時間目は朝八時の授業開始である。したがって八時から十時まで二コマ連続の講義をするために、洗面や朝食の時間も必要だから、たいいてい朝の六時半起床を強いられた。だんだんと寒くなってくると、朝の早いうちから教室に出かけるのはなかなか辛いものがある。宿舎から教

室まで自転車ではんの十分ほどの距離にすぎないが、寒風で耳がちぎれそうになった。

海外漢籍の調査研究というテーマは、これまで自身の必要に迫られて多少の経験がないわけではないが、それを大学の講義で取り上げたことは全くないため、ハードディスクの中から必要な材料を探しつつ、すべて一から準備しなければならず、週一回二時間の講義のために、毎週二、三日を費やしたのではないかと思う。幸いに毎回のパワーポイントは思いのほか好評で、請われるままにコピーして配布した。講義は全部で十二回、前半を日本の漢籍蒐蔵、後半をヨーロッパのそれに宛てた。成績評価のためにレポートの提出を課したが、おおむね予想以上の出来であり、中にはちょっとした論文といつてよいものもあった。

滞在中、何度か学術会議に出た。そのうち一回は基地が主催する「国際漢学と漢籍流伝学術研討会」で、これは到着後すぐ参加を厳命されたので、断れない。そのほか北京では人民大学と国家図書館主催の会議があり、遠いところでは新疆のトルファンの会議にも出た。講演は社会科学学院の歴史研究所と首都師範大学、それから蘭州に行つて蘭州大学と西北師範大学で話をした。上海からもオフアアがあつたが、今回はさすがに遠慮した。

一方、生活のほうはといえば、大学の東門を出て信号をわたりしばらく行ったところに、中関園の奥に中関新園という巨大な外国留学生用宿舍の一群が新しくできていて、その九号楼に部屋を用意してくれていた。九号楼は昔風にいえば専家楼にあたるもので、居間に寝室、バス・トイレと台所、冷暖房完備、冷蔵庫、洗濯機、液晶テレビが二台あり、一人暮らしにはもったいないほどの設備である。しかも新築だから快適この上ない。もっとも帰国間際になって、浴室の壁（！）から水が漏れ出して、見て貰ったところが、すぐには修理不能とのことで、別の部屋に引っ越す羽目になったのは、さすがに中国と思った。待遇は至れり尽くせりで、基地の経費で助手が付く。修士論文作成中の助手H君は、諸々の手続きに付き添ってくれたほか、先生や学生との連絡、買いものの手助け、物品の運搬など、たいへんお世話になった。

北京は乾燥しているせいもあって、前後二度カゼを引いた。これも予定を狂わせた原因の一つで、だいぶ時間をロスしたが、これは漢方の風邪薬と度数の高いアルコールで大事に至らず克服した。なにはともあれ慌ただしく過ぎた四ヶ月であった。しばらくは京都でおとなしくしていようと思っている。



書いたもの一覧 二〇一〇年四月～二〇一一年三月 (氏名五十音順) ●は単行本

浅原達郎

孔子見季桓子の配列 曰古 一六号

十月

李昇燁

●倉富勇三郎日記(1)・大正8年・9年(共編著) 国書刊行会 十一月

“Changing Faces: Colonial Rule in Korea and Ethnic Characterizations”, Yasuko Takezawa (ed.), *Racial Representations in Asia*, Kyoto University Press and Trans Pacific Press 三月

池田巧

西夏文字 文明・文化の交差点(新アジア仏教史05 中央アジア) 十月

60言語で書かれた一冊の本 静修 Vol. 47 No. 1 六月

康定の至高のメニュー
北海道大学中国語中国文学研究室彙報 三七号 十二月
マカオ 南蛮ブレンド 翼の王国 四九九号 一月
中国語学と音声学 トンシユエ 四一号 二月

石井美保

神霊との交換——南インドのプータ祭祀における慣習的制度、

近代法、社会的エイジェンシー 『文化人類学』

七五卷一号 六月

●宗教の人類学(共編)

呪物をつくる、世界をつくる——呪術の行為遂行性と創発性

花淵馨也・石井美保・吉田匡興編『宗教の人類学』

春風社 十一月

未来のポイエーシス——卜占における物語行為と時間

凉子編『時間の人類学——情動・自然・社会空間』

世界思想社 三月

石川禎浩

●中国社会主義文化の研究(編著)

京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター 五月
小説『劉志丹』事件の歴史的背景 石川禎浩編『中国社会主義文化の研究』

京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター 五月
●革命とナショナリズム 岩波書店 十月

晚清「睡獅」形象探源 桑兵・趙立彬主編『転型中的近代中国——近代中国的知識与制度転型學術研討會論文選』

社会科学文献出版社 十二月
書評 飯島渉等編『シリーズ二〇世紀中国史』

東洋史研究 六九卷三号 十二月

伊藤 順 二

第三章 日本で西洋史を学ぶ(共同執筆) 服部良久他編
『人文学への接近方法』

西洋史を学ぶ』京都大学学術出版会 六月
西部戦線戦跡旅行準備次第 人文 五七号 六月

井波 陵 一
旅への誘い——『旅行雑誌』について

センター研究年報 二〇一〇 十月

岩井 茂 樹

「華夷変態」後の国際関係 日本の対外関係6『近世的世界
の成熟』 吉川弘文館 十一月

朝貢と互市 『東アジア近現代通史 1 東アジア世界の近代
一九世紀』 岩波書店 十二月

清代中期の国際交易と海防——信牌問題と南洋海禁案から井
上徹編『海域交流と政治権力の対応』(東アジア海域叢書
2) 汲古書院 二月

午門廷杖考——私刑から皇帝儀礼へ——科学研究費成果報告
書『東アジアにおける儀礼と刑罰』 三月

岩 城 卓 二

掛屋と代官所役人 宇佐美英機・藪田貫編『江戸の人と身
分』1 都市の身分願望』 吉川弘文館 九月

日本近世における噂の力 人文学報 一〇一〇号 三月

稲 葉 稜

8世紀前半のカーブルと中央アジア

西洋史研究 六九卷一号 六月

●Coins, Art and Chronology II: The First Millennium C.E.
in the Indo-Iranian Borderlands. (共編) Austrian Academy of Science. 十二月

Nezak in Chinese Sources. M. Alram et al. (eds.), Coins,
Art and Chronology II: The First Millennium C.E. in
the Indo-Iranian Borderlands. Austrian Academy of
Science. 十二月

From Kesar the Kābulšāh and Central Asia. M. Alram et
al. (eds.) Coins, Art and Chronology II: The First
Millennium C.E. in the Indo-Iranian Borderlands. Aus-
trian Academy of Science. 十二月

●訳注 伝ウマル・ハイヤーム著『ノウルーズの書』(共訳)
京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究セン
ター 三月

●コンタクト・ゾーンの人文学2 物質文化(共編)

ヘラートの「カーマ・ストラ」——中世アフガニスタンにお
けるトランスカルチュレイション 田中雅一・稲葉稜編
『コンタクト・ゾーンの人文学2 物質文化』 見洋書房 三月

悟空(車奉朝)の入竺経路について 科研費成果報告書『中
国印度宗教史とくに仏教史における書物の流通伝播と人物

移動の地域特性」

三月

ウィットヘル、クリスチアン

Mandoku-An Incubator for Premodern Chinese Texts-or How to Get the Text We Want: An Inquiry into the Ideal Workflow. *Digital Humanities* 2010 七月

Towards building a Digital Tripitaka in East Asia. *The Millennium Tripitaka Koreana-Rediscover the Value*

十月

道藏輯要の編纂と電子化をめぐる諸問題 麥谷邦夫編『三教交渉論叢統編』 京都大学人文科学研究所 三月

Notes on some Anecdotes pertaining to Ritual and Punishment from the Recorded Sayings of Chan Buddhism 科研費成果報告書『東アジアにおける礼儀と刑罰』 三月

王 寺 賢 太

La civilisation existe-t-elle dans les deux Indes?: à propos de la description de l'Inde, de la Chine, du Mexique et du Pérou dans l'*Histoire des deux Indes*. Tristan Coignard, Peggy Davis et Alicia Montoya (éd.), *Lumières et histoire*, Champion

フーコー・カント・イート

文学界 七月号 六月

「共産主義の理念」再び注目

朝日新聞東京版(夕刊) 六月二二日
人文 七月

検索と考証

Nécessité/Contingence: Rousseau et les Lumières selon Louis Althusser. *Lumières*, no. 15 七月

書評 自己関係性の諸問題 桑瀬章二郎編『ルソーを学ぶ人のために』書評 週刊読書人 一月二二日

〈社会〉の発見: モンテスキュー『法の精神』 井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス9 政治・権力・公共性』 世界思想社 三月

代表制・公論・信用——『両インド史』の変貌とレナル、ネッセル、デイドロ 富永茂樹編『啓蒙の運命』 名古屋大学出版会 三月

Représentation politique. Opinion publique et Crédit : Les Réformes de la Compagnie des Indes et de la Monarchie Française selon Raynal/Necker. *Zinbun* 2009/2010, no. 42. 三月

大 浦 康 介

ディディエ・ガラスの〈旅〉 劇場文化 (財) SPAC 静岡 六月
県舞台芸術センター

●西洋のフィクション・東洋のフィクション Fiction de l'Occident, fiction de l'Orient. Actes du colloque international (編著・二カ国語版) 京都大学人文科学研究所共同研究資料叢刊 八号 六月

フィクション論のわかりにくさ 人文 五七号 六月

Proces de la fiction, proces de la littérature: sur quelques cas au Japon. Anne DUPRAT et Françoise LAVOCAT

(eds) *Fiction et cultures*, coll. 《Poétiques comparatistes》, Société française de littérature générale et comparée 九月

桑原武夫「第二芸術論」のことなど 創造する市民 九六号

京都市生涯学習総合センター 一月

桑原武夫編『文学理論の研究』を読む 人文学報 一〇一号 三月

岡田 曉生

郷愁の啓蒙—アドルノの交響曲／室内楽論をめぐって 富永

茂樹編『啓蒙の運命』 名古屋大学出版社 三月

●クラシック音楽はいつ終わったのか 人文書院 九月

思想のことば 思想 一二号 十二月

岡村 秀典

漢鏡の図像と銘文—鏡に铸こまれた人びとのころ 文学と

美術 京都国立博物館 七月

青谷上寺地遺跡出土の漢鏡 青谷上寺地遺跡出土品調査研究

報告6金属器 鳥取県埋蔵文化財センター 三月

古鏡研究一千年—中国考古学のパラダイム

東洋史研究 六九卷四号 三月

後漢鏡銘の研究 東方学報 八六冊 三月

小野寺 史郎

南京国民政府期の党歌と国歌 石川禎浩主編『中国社会主义

文化の研究』

京都大学人文科学研究所 五月

地方史研究と王清穆日記 高田幸男・大澤肇編著『新史料か

らみる中国現代史—口述・電子化・地方文献』

南京国民政府時代の党歌和国歌 桑兵・趙立彬主編『転型の

近代中国—近代中国的知識与制度転型學術研討会論文

選』 社会科学文献出版社 十二月

●国旗・国歌・国慶—ナショナリズムとシンボルの中国近代

史 東京大学出版会 三月

籠谷 直人

近代東アジアにおける自由貿易原則の浸透と華僑 総合地球

環境学研究所・深見奈緒子編『第三回全球都市全史研究会

報告集 生態系からみた都市とそのネットワーク』 四月

第一次世界大戦下の東南アジア経済と日本『岩波講座 東

アジア近現代通史 3 世界戦争と改造 1910年代』 岩波書店 十一月

米騒動『岩波講座 東アジア近現代通史 3 世界戦争と

改造 1910年代』 岩波書店 十一月

書評 大島真理夫編著『土地希少化と勤勉革命の比較史—経

済史上の近世』 経済史研究一四号 一月

梶原 三恵子

The “gryha” Formulas in Paipalāda-Saṃhitā 20. ZINBUN

42 三月

加藤 和人

構年報 一号

十月

Regulatory Impacts on Stem Cell Research in Japan.
(Masahiro Kawakami, Douglas Sipp と共著) *Cell Stem Cell*, 6(5) 五月

Science Communication: Significance for Genome-Based
Personalized Medicine-A View from the Asia-Pacific.
(Tetsuya Shirai, Kei Kano と共著) *Current Pharmacogenomics and Personalized Medicine*, 8(2) 六月

Stem Cell Research in Japan: Policy Changes in "the Era
of iPS Cells." (Masahiro Kawakami と共著) *World Stem
Cell Report* 2010 (Genetics Policy Institute) 十月

サイエンスイラストレーション制作における協働プロセス:
『幹細胞ハンドブック』を事例に (大河雅奈と共著)

科学技術コミュニケーション 八号 十二月
ゲノムと社会・倫理 浅島誠、黒岩常祥、小原雄治編『現代
生命科学入門 2・ゲノム科学の展開』 岩波書店 二月

菊地 暁

資料の行方―探検してわかったこと、わからなかったこと―
人文 五七号 六月
京都から考える―京大人類学の二つのオリジン― 谷泰・田
中雅一編『人類学の誘惑』

京大大学人文科学研究社会人類学部門の五〇年」
京大大学人文科学研究 十月
九学会連合能登調査の学問史的再検討 国際常民文化研究機

棚田のこと、アエノコトのこと―石川県輪島市「白米の千枚
田」から― 奈良文化財研究所編・発行『文化的景観研究
集会(第二回) 報告書 生きたものとしての文化的景観―
変化のシステムをいかに読むか―』 十二月

智城の事情―近代日本仏教と植民地朝鮮人類学― 坂野徹・
愼蒼健編『帝国の視角／死角 〈昭和期〉日本の知とメデ
ィア』 青弓社 十二月

ツバメ、カモメなどの展望車にてよみあちはいしことありけ
り―新村出旧蔵柳田国男著作の書人を読む― 人文学報一
〇一号

拝啓 新村出様―柳田国男書簡からみる民俗学史断章― 国
立歴史民俗博物館研究報告 一六五号 三月

今和次郎『日本の民家』(1922) 所収の民家再訪調査―「無
名」の民家を基準とした日本の居住空間・景観の変容分析
― (他五名と共著) 住宅総合研究財団研究論文集 三月

金 志 玪

上清經における水と火のシンボリズム―修行論と救済論―
武田時昌編『陰陽五行のサイエンス 思想篇』

京都大学人文科学研究 二月
玄師と経師―道教における新しい師の概念とその展開 麥谷
邦夫編『三教交渉論叢編』

京都大学人文科学研究 三月

金 文 京

福澤諭吉の漢詩8—友人に贈る詩・人生須く痕有るべし『福澤手帖』一四四 二〇一〇年三月

仏典漢訳の訓読および仏教文学にあたえた影響

佛教文學 三四 二〇一〇年三月

漢文文化圏の提唱 『漢文文化圏の説話世界』（中世文学と隣接諸学）Ⅰ）竹林舎 四月

17세기 후반 韓日간의 武器 밀수 사건의 대해서』『고전과 해석』八古典文学漢文学研究会（韓国） 四月

●三国志演義の世界（増補版） 東方書店 五月

福澤諭吉の漢詩9—硯と富士山『福澤手帖』一四五 五月

金庸の武俠小説と當代中国社会主义文化 石川禎浩編『中国社会主义文化の研究』 京都大学人文科学研究所 五月

中国のこころ ころの未来 四二 六月

富岡鐵齋撰併書「羽倉良豐墓誌銘」について 書法漢學研究 七月

●漢文と東アジア—訓読の文化圏 岩波新書 八月

●三国演義の世界 商務印書館（北京） 九月

北京藏湯賓尹校本通俗三国志傳紀略 『三国志演義古版匯集』 九月

国家図書館出版社（北京）

晚明山人俞安期的活動 復旦大学文史研究院編『都市繁華—

千五百年来的東亜城市生活史』十月

福澤諭吉の漢詩10—旧藩主・大名との関係 『福澤手帖』一四七 十二月

日 下 涉

Governing Informalities of the Urban Poor: Street Vendors and Social Order Making in Metro Manila. *Politics of Change in the Philippines*. Yuko Kasuya and Nahan Quimpo eds. Pasig City: Anvil Publisher. 四月

書評 木下昭著『エスニック学生組織に見る「祖国」——フ

イリピン系アメリカ人のナショナリズムと文化』ソシオ

ロジ 五五卷一号 五月

争われる投票モラリティーフィリピン選挙における売買票と

ポピュリズム 人間圏の探求シリーズ10, Kyoto Working

Papers on Area Studies No. 100 (G-COE Series 98) 六月

「広げること」と「深めること」 Crossover 二八号 七月

グローバル化時代の地方エリート支配—北イロコス州サン・

ニコラス町における投資と地方政治 科研成果報告書『東

アジアにおける「地方的世界」の基層・動態・持続可能な

発展に関する研究』 三月

フィリピン——「争われる民主主義」の挑戦 清水一史・田

村慶子・横山豪志編『東南アジア現代政治入門』 ミネルヴァ書房 三月

久 保 昭 博

第一次世界大戦小説における口語・俗語文体—アンリ・バル
ビュス『砲火』のレアリスムについての一考察 関西フラ
ンス語フランス文学 一六号 二〇一〇年三月

書評 ジョルジュ・ペレック著、塩塚秀一郎訳『煙滅』 四月
らんす 四月号

レーモン・クノの自伝的エクリチュール、あるいは消失の
技法 田口紀子・吉川一義編『文学作品が生まれるとき—
生成のフランス文学』 京大出版会 十月

●表象の傷—第一次世界大戦からみるフランス文学史

人文書院 三月

言語の「脱魔術化」を超えて—ペンサムのフィクション理論

富永茂樹編『啓蒙の運命』 名古屋大学出版会 三月

La Grande Guerre vue à travers des anecdotes : notes
sur la première série d'A la baïonnette. ZINBVN 42.

三月

黒岩 康 博

宮武正道の「語学道楽」—趣味人と帝国日本— 史林 九

四卷一号

第九章 宗教・文化（解説） 茨木市史編さん委員会編『新

修茨木市史』六巻

茨木市 三月

奈良県の地方官と平城宮跡保存（解説） 奈良文化財研究所

編『明治時代平城宮跡保存運動史料集』 棚田嘉十郎聞

書・溝辺文四郎日記—（奈良文化財研究所史料 八十七

冊）

奈良文化財研究所 三月

小池 郁子

想像／創造されたアフリカ性の時間—アフリカ系アメリカ

人のオリシャ崇拜運動の初期から衰退期をめぐって 西井
凉子編『時間の人類学—情動・自然・社会空間』

世界思想社 三月

合衆国のアフリカ王、オセイジェマン・アデフンミ—大西
洋をわたる「ヨルバ人」がおりなす社会運動の変容 真島
一郎編『二〇世紀（アフリカ）の個体形成—南北アメリ
カ・カリブ・アフリカからの問』 平凡社 三月

Changing Orisa Worship: Anti-White/Christian Ideology
and the Black Relationships with Africa in the Yoruba
American Socio-Religious Movement. ZINBVN, No.42

三月

古勝 隆一

儒教経学と仏教の経疏 東アジア仏教史（南北朝 仏教の東

伝と受容）

十二月

武則天「升仙太子碑」立碑の背景 麥谷邦夫編『三教交渉研
究論叢統編』 京都大学人文科学研究所 三月

礼から法へ…北魏における礼の法制化について 科研費成果
報告書『東アジアにおける礼儀と刑罰』 三月

小関 隆

書評 法政大学比較経済研究所・後藤浩子編『アイルランド
の経験…植民・ナショナリズム・国際統合』 歴史と経済

二〇八号

七月

●徴兵制と良心的兵役拒否…イギリスの第一次世界大戦経験

人文書院 九月

●イギリス文化史（共編著）

昭和堂 十月

高木博志

近代天皇制与天皇陵墓 文化遺産（中山大學） 総第一二期

四月

維新変革と天皇 開化政策と土族反乱 大日本帝国憲法発布に向けて 藤井譲治・伊藤之雄編『日本の歴史―近世・近現代編』 ミネルヴァ書房 五月

中川泉三没後七〇年記念展実行委員会編『史学は死学にあらず』の「紹介」 新しい歴史学のために 一二六号 五月

●歴史のなかの天皇陵（山田邦和と共編） 思文閣出版 十月

世界遺産暫定リストに入った「仁徳天皇陵」 毎日新聞（夕刊） 十一月一日

古都の近代と京都イメージ 近代画説 一九号 十二月

開発と保存―一九三三年七月二三日「東大寺旧境内」史蹟指定 日本歴史 七五二号 一月

●茨木市史編さん委員会編『新修茨木市史』六卷（責任編集）

茨木市 三月

高田時雄

Об изменении, внесенных в текст «Записок о Западном крае, [составленных в правление] Великой династии Тан» («Да Тан Си юй цзи» управление танского Гао-цзуня (650-684), Письменные

Памятники Востока 2009-2

四月

Khumdan 的對音 張廣達先生八十華誕祝壽論文集 宋刊本《周易集解》的再發現 國際漢學研究通訊 二期

九月

解説 平定安南戰圖・平定狃苗戰圖 『乾隆得勝圖 域戰圖・平定狃苗戰圖』 平定西 十月

李盛鐸舊藏寫本《驛程記》初探 敦煌寫本研究年報 五號 十一月

高階 絵里加 五月

●翻訳 アルフレート・ネメチェク『ファン・ゴッホの悲劇』 岩波書店 五月

美術の中の裸体美 西洋から日本へ 『乳房文化研究会 二〇〇九年度講演録』 乳房文化研究会 六月

日仏美術の交流―浮世絵から印象派まで― 大阪日仏協会会報 二八 六月

岩崎彌之助と山本芳翠の《十二支》および作品解説 『三菱が夢見た美術館 岩崎家と三菱ゆかりのコレクション』展 図録 三菱一号館美術館 八月

Iwasaki Yanosuke and the Yamamoto Hosu's Oriental Zodiac Signs (Junishi), From Dream to Reality The Iwasaki Mitsubishi Collection, Mitsubishi Ichigokan Museum 八月

佐久間文吾《和氣清麻呂奏神教図》 国華 一三八二号 十二月

高橋由一《山形市街図》と江戸名所絵 人文学報 一〇一号

美術逍遙 日本経済新聞 四月五日、五月十日、五月十七日、

六月十四日、六月二十一日、七月二十六日、八月二日、八月三十日、九月六日、十月十八日、十月二十五日、十一月二日、十一月二十九日、一月十七日、一月二十四日、二月二日、二月二十八日

竹 沢 泰 子

大震災の経験踏まえ新展示室 多文化共生『神戸新聞』

女性から、マイノリティから、周縁から生まれる新しい発想の可能性を求めて『持続可能な研究者支援、筑波大

スタイル 平成21年度事業報告書』（講演会記録） 国立大学法人筑波大学

パリ20区、僕たちのクラス『京都新聞』

●*Racial Representations in Asia.* (編著) Kyoto University Press

Introduction, in *Racial Representations in Asia.* 二月

Toward a New Approach to Race and Racial Representations, in *Racial Representations in Asia.* 二月

New Arts, New Resistance: Asian American Artists in the "Post-race" Era, in *Racial Representations in Asia.* 二月

●*Interface between Humanities and Genomics.* (編著) Interface for Research in Humanities, Kyoto University 三月

●*Racial Representations of Japanese/Asian Americans.* (編著) Institute for Research in Humanities, Kyoto University 三月

武 田 時 昌

人文研アーカイブス(19)『研究視察旅行報告書』(稿本)

センター研究年報二〇一〇 十月

鍼灸パラダイム談義〜東アジア伝統科学の想像力〜 第一回 鍼こそ中国の三大発明!? 医道の日本 八〇八号 一月

鍼灸パラダイム談義〜東アジア伝統科学の想像力〜 第二回 五臓六腑という小宇宙 医道の日本 八〇九号 二月

●陰陽五行のサイエンス 思想編(編著)

人文科学研究所 二月

五音と五行―音楽理論と占術のあいだ― 陰陽五行のサイエンス 思想編 二月

鍼灸パラダイム談義〜東アジア伝統科学の想像力〜 第三回 漢代における思想と医療の大革命 医道の日本 八一〇号 三月

田 中 雅 一

コラム『ホモ・キエラルキクス』によせて 奈良康明・下田正弘編『新アジアの仏教史01 インドー 仏教出現の背景』

●人類学の誘惑―京都大学人文科学研究所社会人類学部門の五

○年(共編)

人文科学研究所 十月
伝統のリズムにのって——一九九〇年以後の共同研究のあ
ゆみ 谷泰・田中雅一編『人類学の誘惑——京都大学人文
科学研究所社会人類学部門の五〇年』

人文科学研究所 十月

創設五〇周年記念シンポジウム コメント・総合討論 司会へ

田中雅一・田辺明生 谷泰・田中雅一編『人類学の誘惑
——京都大学人文科学研究所社会人類学部門の五〇年』

人文科学研究所 十月

あとがき 谷泰・田中雅一編『人類学の誘惑——京都大学人
文科学研究所社会人類学部門の五〇年』

人文科学研究所 十月

寡婦——都合のいい女?それとも悪い女? 椎野若菜編
『「シングル」で生きる——人類学者のフィールドから』

御茶の水書房 十月

●南アジア社会を学ぶ人のために (共編) 世界思想社 十月
通過儀礼 田中雅一・田辺明生編『南アジア社会を学ぶ人の
ために』

世界思想社 十月

王権と支配 田中雅一・田辺明生編『南アジア社会を学ぶ人
のために』

世界思想社 十月

●癒しとイヤラシーエロスの文化人類学 《双書ZERO》

筑摩書房 十一月

男性身体と野生の技法——強精剤をめぐる自然・もの・身体
床呂都哉・河合香史編『ものの人類学』京都大学学術出版
会 一月

書評『タブー——パキスタンの買春街で生きる女性たち』

Cutting-Edge 四〇、四一合併号

二月

交叉イトコ婚からシマイ交換婚へ——スリランカ・タミル漁
村における初潮儀礼と結婚式の分析 関西学院大学社会学

部紀要 一一号

三月

運命的瞬間を求めて——フィールドワークと民族誌記述の時
間 西井凉子編『時間の人類学——情動・自然・社会空

間』 世界思想社 三月

●コンタクト・ゾーンの人文学 第一巻 Problematique／問
題系 (共編)

晃洋書房 三月

本書の構成——Problematique／問題系 田中雅一・船山

徹編『コンタクト・ゾーンの人文学 第一巻 Problema-
tique／問題系』 晃洋書房 三月

コンタクト・ゾーンの人文学へ 田中・船山編『コンタク

ト・ゾーンの人文学 第一巻 Problematique／問題系』

晃洋書房 三月

コンタクト・ゾーンとしての占領期ニッポン 田中・船山編

『コンタクト・ゾーンの人文学 第一巻 Problematique
／問題系』 晃洋書房 三月

●コンタクト・ゾーンの人文学 第二巻 Material Culture／

物質文化 (共編) 晃洋書房 三月

本書の構成——Material Culture／物質文化 田中雅一・

稲葉穰編『コンタクト・ゾーンの人文学 第二巻 Mate-
rial Culture／物質文化』 京都大学人文科学研究所、晃洋書房 三月

田中 祐理子

一九世紀の果実、二〇世紀の種子——パストゥールについて

——富永茂樹編『啓蒙の運命』名古屋大学出版会 三月

自生するものについて——アメリカ、二〇世紀をめぐる試論

——富永茂樹編『啓蒙の運命』名古屋大学出版会 三月

Koch's Technologies and Postulates: How They Work

Together in Connecting the Material and the Human

in the Foundation of Bacteriology ZINBUN No. 42 三月

立木 康介

露出せよ、と現代文明は言う 第二回 「他者は近く、そして遠く」 文藝 二〇一〇年夏号 四月

座談会 来るべき精神分析のために（十川幸司氏、原和之氏と） 思想 二〇一〇年六号 六月

ラカン派 一九六四— 思想 二〇一〇年六号 六月

日本精神分析史の黎明 思想 二〇一〇年六号 六月

露出せよ、と現代文明は言う 第三回 「子どもの国のキタ・セクスアリス」 文藝 二〇一〇年秋号 七月

芸術・思考・心的空間 京都国立近代美術館『Trouble in Paradise／生存のエシックス』展カタログ 七月

露出せよ、と現代文明は言う 第四回 「コンテンツなき身体、思考なき無意識」 文藝 二〇一〇年冬号 十月

翻訳 ジークムント・フロイト「神経症の遺伝と病因」『フ

ロイト全集3』

露出せよ、と現代文明は言う 第五回 「フォン・ハーゲンスのアートと「二つの死のあいだ」」 文藝 二〇一一年春号 一月

快樂と幸福のアンチノミー 富永茂樹編『啓蒙の運命』名古屋大学出版会 三月

富永茂樹 明倫アート 一一一号 五月

ふたりの女性歌手 明倫アート 一一一号 五月

メッセージ 《京都の暑い夏》（一五周年記念ドキュメントブック） 京都の暑い夏事務局 八月

私の知らない東京 明倫アート 一二四号 八月

●トクヴィル—現代へのまなざし 岩波書店 九月

芸術という文化 井上・長谷編『文化社会学入門—テーマとツール』 ミネルヴァ書房 十月

ナントの雨 明倫アート 一二七号 十二月

ある都市のかたち 明倫アート 一二三〇号 二月

●啓蒙の運命（編著） 名古屋大学出版会 三月

A・トクヴィル《デモクラシーの逆説》井上・伊藤編『社会学ベーシックス・9 政治・権力・公共性』 世界思想社 ？月

富谷 至 特別関於二年律令

江陵張家山二四七号墓出土竹簡 —— 特別関於二年律令

【簡帛研究】二〇〇八 九月

● *Ritual and Punishment in East Asia* (Symposium organized by the Royal Swedish Academy of Letters and Antiquities and Kyoto University, 16-17 September 2010)

十二月

● 科研費成果報告書『中国古代官制和英用語集』

三月

● 科研費成果報告書『東アジアにおける儀礼と刑罰』

三月

復讐と儀礼 科研費報告書『東アジアにおける儀礼と刑罰』

三月

永田知之

『国清百録』管窺―書札文定型化の資料として 敦煌写本研究年報

究年報 五号

三月

藤井律之

Jk17749「夾注本黄石公三略」小考 敦煌写本研究年報

号

三月

藤井正人

古代インドにおける王権と儀礼 奈良康明・下田正弘編『新

アジア仏教史 01 インド I 仏教出現の背景』

佼成出版社 四月

The Recovery of the Body after Death: A prehistory of the *devayāna* and *pīṭyāna*. Studia Orientalia 110 (Fs. Klaus Karttunen).

三月

The *Gāyatra-Sāman*: Chanting Innovations in the

Sāmavedic Brāhmaṇas and Upaniṣad. ZINBUN 42. 三月

船山 徹

The work of Paramārtha: An example of Sino-Indian cross-cultural exchange. *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 31.1-2 2008 (2010)

四月

● 高僧伝(四)(共著)

仏典漢訳史要略 『新アジア仏教史 6 東アジア仏教史中国

1』 岩波書店 九月

1

校正出版 十二月

● コンタクトゾーンの人文学(共編)

文化接触としての仏典漢訳―「格義」と「聖」の序論的考察 田中雅一・船山徹編『コンタクトゾーンの人文学』

晃洋書房 三月

梵網経下巻先行説の再検討 麥谷邦夫編『三教交渉論叢続編』

京都大学人文科学研究所 三月

● 科研費成果報告書『中国印度宗教史とくに仏教史における書物の流通伝播と人物移動の地域特性』(編著)

三月

水野直樹

『帝国日本』の植民地支配 藤井讓二・伊藤之雄編著『日本の歴史 近世・近現代編』

ミネルヴァ書房 五月

京都の伝統産業と在日コリアン(シリーズ人権・心のカギ) 市民しんぶん(京都市) 八一九号

大逆事件一〇〇年を語る(シンポジウム記録) 月刊むすぶ

四七三号

六月

大谷派における解放運動の歴史と課題Ⅱ―朝野温知(李壽龍) 宗教に差別のない世界を求めて―(二〇〇九年度人權週間ギャラリー展シンポジウム) 身同(真宗大谷派解放運動推進本部) 三〇号 六月

「韓国併合一〇〇年」と歴史認識

京都新聞 七月一六日朝刊 七月

日本人は朝鮮の絵はがきに何を見たか 高麗美術館展示図録『写真絵はがき』の中の朝鮮民俗 八月

日本の「韓国併合」一〇〇年を考える(第5回)

図書新聞 二九八〇号 九月

創氏改名を避けることはできなかったか キム・ナムスほか編『一〇〇年前の韓国史』(ヒュマニスト、ソウル) 八月

皇民化政策期の植民地支配に関する一考察―「皇国臣民ノ誓詞」について―「併合一〇〇年」国際学術討論会論文集(ソウル、東北亜歴史財団主催) 八月

対談 韓日強制併合一〇〇年 韓国日報(ソウル) 八月二八日 八月

朝鮮学校への「高校無償化」適用問題を考える

京都大学新聞 第二四五九号 九月一六日

「創氏改名」「内鮮一体」「戸籍」など九項目 国際高麗学会日本支部「在日コリアン辞典」編集委員会編『在日コリアン辞典』(明石書店) 十一月

●京都と韓国の交流の歴史(4) 韓国民団京都府本部 十二月
「博文寺の和解劇」と後日談―伊藤博文、安重根の息子たちの「和解劇」・覚え書き― 人文学報 一〇一号 三月

皇民化政策の虚像と実像―「皇国臣民の誓詞」についての一

考察―国立歴史民俗博物館編『韓国併合』一〇〇年を問う 二〇一〇年国際シンポジウム 岩波書店 三月

「韓国合併奉告祭碑」の前で考える 趙景達・宮嶋博史・李成市・和田春樹編『韓国併合』一〇〇年を問う『思想』特集・関係資料 岩波書店 三月

尹東柱・宋夢奎の「朝鮮独立運動事件」判決文を読む 立命館平和研究(立命館大学国際平和ミュージアム紀要) 一 三月

二号

宮 紀 子

●朝鮮が描いた世界地図…モンゴル帝国の遺産と東アジア(金騰泳訳) 笑臥堂 十月

全真教からみたモンゴル時代の東西交流―和算の来た道―橋寺知子・森部豊・新谷英治編『アジアが結ぶ東西世界』 関西大学出版部 三月

宮 宅 潔

クサンテン考古学公園 人文 五七号 六月

書評 廣瀬薫雄著『秦漢律令研究』 古代文化 六二巻二号 九月

●中国古代刑制史の研究 京都大学学術出版会 一月

中国古代軍事史研究の現状 国際シンポジウム「中国古代軍事制度研究の課題と展望」報告書 三月

向井 佑介

魏の洛陽城建設と文字瓦 待兼山考古学論集Ⅱ

大阪大学考古学研究室 二〇一〇年三月

東アジアの文字瓦 文化遺産学研究四 国士館大学文化遺産

研究プロジェクト

三月

麥谷 邦夫

●三教交渉論叢編(編著) 京都大学人文科学研究所 三月

唐・玄宗の三經御注をめぐる諸問題—『御注金剛般若經』を

中心に—三教交渉論叢編

三月

曇鸞と陶弘景—「仙方十卷」をめぐる— 科研費成果報告

書『中國印度宗教史とくに佛教史における書物の流通傳播

と人物移動の地域特性』

三月

森 時彦

論一九二〇年代中国棉紡績業の重組与高陽織布業 社会科学

院近代史研究所六〇周年国際学術研討会論文集

五月

清末中国吸納經濟学 (political economy) 路徑考—以梁啓超

为中心—『清代政治与国家認同』 国際学術研討会論文集

八月

河北省新河県の社会流動与戸口变化動向 欧陽恩良主編『近

代中国社会流動与社会控制』

社会科学文献出版社 十一月

守岡 知彦

CHISEのセマンティック Wild 化の試み 情処研報 2010-

CH87

七月

電子書籍とソフトウェアの自由—電子書籍の永続化のために

—漢字文献情報処理研究 第11号

十月

レガシーとの付き合い方—東洋学文献類目の場合 漢字文献

情報処理研究 第11号

十月

デジタル写真資料の WWW に基づく共有・管理手法について 第16回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」

十一月

Wild 的手法に基づく構造化データの編集について 人文科

学とコンピュータシンポジウム論文集 人工工学の可能性

—異分野融合による「実質化」の方法— 情報処理学会シ

ンポジウムシリーズ Vol. 2010, No. 15

写真の検索可能性について考える 文字と非文字のアーカイ

ブズ/モデルを使った文献研究

XEmacs CHISE の IVS をサポートしてみる? 東洋学への

コンピュータ利用 第22回研究セミナー

三月

矢木 毅

高麗時代の貴族文化—その社会的・政治的背景について 大

阪市立東洋陶磁美術館「友の会通信」九五号

十月

儀仗と刑杖—朝鮮後期の棍杖刑について 科研費成果報告書

『東アジアにおける儀礼と刑罰』

三月

安岡孝一

人名用漢字の新字旧字「茁」と「留」と「畱」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月八日

人名用漢字の新字旧字「玻」は常用平易か（追補）

三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月十六日

人名用漢字の新字旧字「郷」と「郷」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月二二日

人名用漢字の新字旧字「穰」と「穰」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月六日

人名用漢字の新字旧字「恵」と「恵」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月二十日

人名用漢字の新字旧字「遷」と「遷」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月三日

常用漢字表の改定と人名用漢字

三省堂ワードワイズ・ウェブ

六月十七日・十八日・二一日・二二日

子の名付け・人名漢字の制限・再考を

朝日新聞 六月二九日

人名用漢字の新字旧字「気」と「氣」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月一日

The Origins and Current State of Digitization of Humanities in Japan Digital Humanities 2010 七月十日

人名用漢字の新字旧字「聡」と「聰」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月十五日

人名用漢字の新字旧字「間」と「間」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月二九日
パソコンのキーボードはどのようにして順番が決められているのですか？ 子供の科学 七三巻九号 八月十日

人名用漢字の新字旧字「鉉」と「鑲」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月十二日

人名用漢字の新字旧字「広」と「廣」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月二六日

人名用漢字の新字旧字「点」と「點」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月九日

人名用漢字の新字旧字「亘」と「互」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月二三日

失われた文字コード 漢字文献情報処理研究 十一号 十月

人名用漢字の新字旧字「悦」と「悦」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月七日

人名用漢字の新字旧字「来」と「來」と「徠」と「徠」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月二一日

人名用漢字の新字旧字「箆」と「篋」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月四日

人名用漢字の新字旧字「剥」と「剝」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月十八日

改定常用漢字表に関する規格検討委員会報告

日本規格協会 十一月十八日

人名用漢字の新字旧字「碍」と「礙」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月二日

人名用漢字の新字旧字「齋」と「齋」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月十六日

人名用漢字の新字旧字「逸」と「逸」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月十三日

UnicodeのIVSがもたらすメリットとデメリット

日経ITpro 一月二七日

人名用漢字の新字旧字「媛」と「媛」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月二七日

人名用漢字の新字旧字「翠」と「翠」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月十日

動画のテキスト処理

文字と非文字のアーカイヴズ／モデル
を使った文献研究 二月十八日

人名用漢字の新字旧字「鉄」と「鐵」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月二四日

人名用漢字の源流

三省堂ワードワイズ・ウェブ
三月十日・十四日・十六日・十八日・二一日・二四日

IVSで書けない常用漢字

東洋学へのコンピュータ利用 第二回研究セミナー
三月十八日

●新しい常用漢字と人名用漢字

三省堂 三月

On the Prehistory of QWERTY ZINBUN, No. 42 三月

山崎 岳

同化と異化―明代広西の「猺獞」と土官岑氏一族 史林 四

八五号

方国珍と張士誠―元末江浙地方における招撫と反逆の諸相 一月

井上徹編『海域交流と政治権力の対応』

汲古書院 二月

山室 信 一

万博倒計時 現代のことは 京都新聞(夕刊) 四月一四日

余と到―読書をめぐる三と四 岩波文庫・読書のすすめ 一

四 アスティオン 七二 五月

熊本とアジア 公德 一八 五月

短命内閣 現代のことは 京都新聞(夕刊) 六月九日

The Source and Development of Japan's Philosophies

Non-Violence The Journal of Oriental Studies 20 八月

未来志向 現代のことは 京都新聞(夕刊) 八月一七日

三権分立 現代のことは 京都新聞(夕刊) 十月一四日

第一次世界大戦の衝撃と帝国日本 和田春樹・山室信一ほか

編『東アジア近現代通史』三巻 十一月

宮崎滔天 和田春樹・山室信一ほか編『東アジア近現代通

史』三巻 十一月

●『日露戦争の世紀―連鎖視点から見る日本と世界』(ハンダ

ル版、鄭在貞訳) 翰林新書九五 小花 十一月

●『憲法9条の思想水脈』(ハンダ版、朴東誠訳) 東北亜歴

史財団 十一月

いま日露戦争を知るために―世界的連鎖の視点からのアプロ

ーチ 歴史読本 五六巻一号 十二月

世紀の鏡 現代のことは 京都新聞(夕刊) 十二月一日

出版・検閲の態様とその遷移（金仁洙訳、ハングル版）『植

民地検閲』成均館大学 一月

●複合戦争と総力戦の断層―日本にとっての第一次世界大戦

人文書院 一月

裁判員裁判 現代のことは 京都新聞（夕刊）二月一七

日 文学報 一〇

国民帝国日本における異法域の統合と格差 人文書院 一〇

一号 三月

石橋湛山 和田春樹・山室信一ほか編『東アジア近現代通

史』四巻 三月

横山俊夫

仲立つことのひろがり 木田安彦の世界「富士百観とふる

さとの名山」展 思文閣美術館 四月

●生まれと育ち（共編、第27回'09比叡会議報告書）

日本アイ・ビー・エム株式会社 四月

The 10th Project Evaluation Committee Meeting 2010（共

同作成、第10回研究プロジェクト評価委員会記録／CD

版）Research Institute for Humanity and Nature（総

合地球環境学研究所） 四月

老いを楽しむ ①（企画、編集、リード執筆）フォーラム

新・地球学の世紀29 深澤一幸、中国古典にみる老いの過

ごし方―その変遷をたどる WEDGE 十二月

京都大学大学院地球環境学舎 地球環境学舎 三才学林 年報

―平成21年度（共同執筆、地球文明論分野ならびに三才学

林関係項目担当）地球環境学舎 十二月

老いを楽しむ ②（企画、編集、リード執筆）フォーラム

新・地球学の世紀30 山極寿一、老いの進化を考える―霊

長類学から WEDGE 一月

●嶋臺塾記録 第六冊（企画・編集・後記）

京都大学大学院地球環境学舎 三才学林 二月

老いを楽しむ ③（企画、編集、リード執筆）フォーラム

新・地球学の世紀31 松林公蔵、豊かな老いを訪ねて

―フィールド医学の現場から WEDGE 二月

老いを楽しむ 京都特別会（企画、編集、リード執筆）フォ

ラム 新・地球学の世紀 やなぎみわ、老いを描く老

いを演じる―翁と囀にみる老人観 WEDGE 三月

学位論文審査報告書（共同執筆／中野文彦「18世紀岡山藩の

文明化―再生可能エネルギー社会の駆動と制御―）

京都大学大学院地球環境学舎 三月

色道書の言語をめぐる文明史的研究 京都大学人文科学研究

所要覧二〇一〇 人文科学研究のフロンティア

京都大学人文科学研究所 三月

Civility in a Polytheistic Environment: A Perspective

from the Japanese Experience, Zinbun, No.42

(2009/2010) 三月

Linguistic Analyses of *Shikido* Guides—from the perspec-

tive of premodern Japanese civilisation, Zinbun, No.42

(2009/2010) 三月

三才学林 Sansai Gakurin/ Grove of Universal Learning

(共同執筆) 京都大学大学院 地球環境学堂・地球環境学
舎・三才学林 ガイドブック 2011/ *Graduate School of
Global Environmental Studies, Kyoto University Guide
Book 2011* 三月

人

文

第五八号

二〇一一年六月三十日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品